

両部典礼論

著者	秋山 学
著者別名	AKIYAMA Manabu
雑誌名	古典古代学
巻	10
ページ	67-108
発行年	2018-03-31
URL	http://hdl.handle.net/2241/00150464

両部典礼論

著者	秋山 学
雑誌名	古典古代学
巻	10
ページ	67-108
発行年	2018-03-31
URL	http://hdl.handle.net/2241/00150464

両部典礼論

秋山 学

1. 「両部」という語の意味について.

「両部」という表現は、例えば江戸時代後期の高僧・慈雲尊者飲光(1718-1804)による著作『両部曼荼羅随聞記』に示されているように、通常は金剛部と胎蔵部という「二部」よりなる密教曼荼羅の部立てを指す。しかしながらこのように金剛部と胎蔵部を「両部」として整備したのは、中国・唐の時代に入唐し、恵果(746-805)より受法した空海(774-835)であった。恵果は不空三蔵(705-774)の弟子であり、不空からは『金剛頂経』系の、一方善無畏三蔵(637-735)の弟子の玄超和上(767頃)からは『大日経』系と『蘇悉地経』系の密教を授けられたとされる(松長1989:232)。したがって正確には、これら二部の秘法を「両部」として整備し、即身成仏の論を基に密教体系を確立したのは、恵果から金胎の秘法を伝授された弘法大師空海であると言ってよい。つまり、金胎不二を掲げる密教と言っても、元来『金剛頂経』のみ、あるいは『大日経』のみによる法統がすでにあり、『金剛頂経』(金剛部)と『大日経』(胎蔵部)双方の伝承が個々別々に成立していた。そればかりでなく、これらに『蘇悉地経』を加えた法統があり、こちらは後に円仁(794-864)や円珍(814-891)によって継承されるのであって(三崎1988)、「両部」という発想自体は空海の独創になる。それらを「不二」と喝破し、両部の曼荼羅をとともども掲げて双修するところに真言密教の独自性が見出される。

さて、古今東西の文献を扱うべき学問分野(特に「総合文学」)にあっては、これら「両部」の発想をさらに発展させ、東西の靈性をそれぞれ根底から掴み取り、その核心部を内在化させる努力が必要不可欠である。このプロセスを本稿では「儀軌化」「典礼化」と呼びたい。「儀軌」とは、『岩波仏教辞典』(第2版)によれば「儀式・祭典の実行に関する規則・細則。元来はヴェーダ聖典における命令事項、諸神礼拝の手続きを指したが、密教に取り入れられて、仏・菩薩・諸天(天部)などの図像学的取り決め(造像儀軌)、念想の作法(念誦儀軌)、供養の仕方(供養法)、印契の結び方(結印法)・実施順序(次第)などの約束ごと一般(密軌)を意味するようになった」(中村ほか2002:192)とされる。筆者は、2005年から翌年にかけて行った筑波大学在外研究(長期派遣)により、キリスト教の核心を形成すべき終末論的典礼様式、すなわちビザンティン典礼の研究をギリシア・カ

トリック教会の共同体において遂行しえた。ここで「典礼」と「儀軌」とは、意味内容上同義であると考えられるが、筆者は、東方文化研究のためにより適した典礼様式として、仏教、特に密教に基づいた儀軌を模索してきた。その間に慈雲尊者の直筆本『法華陀羅尼略解』の発見（秋山 2010a）などもあったが、現時点では、この「法華陀羅尼」を中核とし、かつ慈雲がその梵典研究に専念した「普賢行願讚」をも含む『成就妙法蓮華經王瑜伽觀智儀軌』すなわち『觀智儀軌』が、金胎合揉の密教儀軌でありながら『妙法蓮華經』を包摂するという意味において、仏教文献いな東洋文献の中で最も包括的と言えるのではないかという見解を抱くに至っている。つまり筆者は、西方はビザンティン典礼、東方は『觀智儀軌』によって、東西それぞれの「儀軌」が代表されうるのではないかと考えるものである。そして洋の東西をめぐってこのように基軸の2儀軌を設定するなら、これらは現代における「両部の典礼」と言えるのではないかと、というのが正直な感想である。

この「両部」という表現には、ちょうどイタリア語における対応語が存在する。それは *birituale* という形容詞であり、名詞形は *biritualità* となるが、その意味するところは、カトリック教会で主としてローマ典礼とビザンティン（ギリシア）典礼を「“どちらも” 举行しうる」（資格を持つ司祭）ということである。したがって、ここで「両部」という表現を用いた場合、「金胎不二」の場合と同じように、言うまでもなく「両部」における両者が同一の原点から発しかつ同一の原点に帰着する、という前提がなければならない。本稿の内容に照らすなら、私見ではおそらくその前提は、後に挙げる「信条」における聖霊の発出に関わる *Filioque* という句に求められる。「子からも」というこの句は、「父より子を通して」という形で通常流布しているギリシア語版信条とは異質な次元を開く。「父より子を通して」であれば、子の終末論的王性が顕著となる。一方「子からも」であれば、「父」からの、単独での聖霊の発出が保証され、旧約的次元での救済が確保されよう。つまり、キリストを介さない仏教の次元で「聖霊の発出」を論じうる、という斬新な地平が開かれるのである。

さて本学・筑波大学には、江戸時代後期の高僧・慈雲尊者飲光（1718–1804）による最晩年の直筆本『法華陀羅尼略解』（1803年3月4日記）が所蔵されている。この『略解』を含め、前身校として旧東京師範学校を戴く本学には、おそらく明治初期における廃仏毀釈の影響によると思われる、多数の仏教・梵学関係の貴重書が所蔵されている。これら30点あまりの和書について、筆者は2010年秋に開催された附属図書館特別展「慈雲尊者と悉曇学—自筆本『法華陀羅尼略解』

と「梵学津梁」の世界一」において一括公開した（秋山 2010a）。本稿は、それ以降における筆者の慈雲研究を踏まえ、筑波大学に内在的な「儀軌」を制定するとすれば、それはいかなる形式を備えた次第でありうるか、を考えた成果である。

2. 慈雲著『法華陀羅尼略解』

まずは、上述した『法華陀羅尼略解』に関する解説が必要であろうが、これについては上掲の図書館特別展図録（現在は電子資料として公開中）、および 2018 年の慈雲生誕 300 年祭にあわせて刊行予定の拙著『律から密へ 一晩年の慈雲尊者一』（春風社；秋山 2018 予定）に、関連の論考も併せて収録する予定である。また、この『略解』は『妙法蓮華経』第 26 品および第 28 品に含まれる計 6 個の陀羅尼に関する注疏であるが、これらの陀羅尼はいずれも、次項以下に掲げる『成就妙法蓮華経王瑜伽観智儀軌』に収められている。そこで次に、この『成就妙法蓮華経王瑜伽観智儀軌』すなわち『観智儀軌』について概説する。

3. 『成就妙法蓮華経王瑜伽観智儀軌』の構造と意義

この経法は、本稿第 5 節以下にその全文を書き下しにより示すように、まず四縁、灌頂、擇地、壇法を略説した後、順に地天、如来慈護、無能勝、驚天地神、塗壇法、三重曼荼羅を委説し、普礼、普賢行願、無量寿決定、如来三昧耶、法界生、金剛薩埵轉法輪、金剛甲冑、如来大慈、方隅界、不動結界、寶山、道場観、大虚空蔵、心観曼荼羅、纒發意轉法輪、法性道場観、大鉤召、闍伽、華座等の印明、薬王、勇施、毘沙門、持国、十羅刹女の 5 真言、報恩念、五供養、入定、五相成身、普賢真言、普賢三昧耶、五佛灌頂、寶鬘、甲冑、普賢定、文殊定、月輪観、普賢陀羅尼の字輪観、誦経観想、法身真如観へと進む（諸種下線は筆者による）。五相成身以前は胎蔵界法に近く、それ以後は金剛界法に近い（密教学会 1970）。

この『観智儀軌』は「不空訳」として伝えられるが、実際には 773 年に、『大日経』や『金剛頂経』を基にして『法華経』を儀軌化した不空の著作であると考えられている（鎌田・河村 1998：293）。その主旨は「行者が、大悲胎蔵大曼荼羅に入り、護摩道場を見て、その身中の業障を滅し、自らの身が普賢菩薩の身と等しいと観ずることであるという。この法の根幹は、金剛頂経に説かれる五相成身観であると考えられるが、それ以前までの構成は胎蔵系の次第に近く、それ以降は金剛界の次第に近いとため、胎蔵系と金剛界系とを合揉させた内容となっている」とされる（同）。そして「東密家で法華経を浅略であると為し、大日経を深秘であると見なしている根拠は、即ちこの儀軌による」（小野 1964）。

したがってこの儀軌に用いられる曼荼羅自体は「胎蔵曼荼羅」と統一的に想定されるものの、胎蔵曼荼羅を用いつつ、金胎合揉の次第に依って『妙法蓮華経』の儀軌を行うことになると言える。

4. ビザンティン典礼における「常用祈祷文」

本稿はこのように、「西方」の「儀軌」としてビザンティン典礼を、「東方」の「典礼」として『観智儀軌』を据えようとするものであるが、最初に「西方」の儀軌様式から出発することにしよう。本稿では「東洋」を「東方」、「西洋」を「西方」と置き換えるため、本稿で「西方儀軌」という場合、欧米でふつうに言う「東方典礼」「西方典礼」を一本化させる必要性から（「両部」の東方については、これを仏教関連の典礼様式で代表させるため）、通常のキリスト教の「西方典礼」に比して東方よりのものとなっている。ビザンティン典礼のほうが（西方）ローマ典礼よりも歴史的に古い伝承を留めていることに鑑み、史的背景・経緯を勘案して「一本化」を図るという意図にもよる。

ビザンティン典礼に従う教会共同体の祈祷書には、巻頭に「常用祈祷文」という部分が設けられており、そこには1)「常なる初め」と呼ばれる諸種の祈祷文が挙げられている。これは1a「天の王」、1b「聖なる神」、1c「聖三位一体よ」、1d「主祷文」、1e「来たれ」より成るが、これら1a～1eの祈りは、日常的に行われる以外に、特に晩課の始まりに先立って唱えられる（秋山 2010b）。以下に掲げるのがこの1)「常なる初め」である。

「われらの神はとこしえに讃えられてあれ、今もいつも世々に、アーメン。あなたに栄光あれ、神よ、あなたに栄光あれ」。

1a「天の王、慰め主、真理の霊、すべてに遍在し万物を満たす方、あらゆる善の泉、生命の与え主、来たりてわれらのうちに住みたまえ。われらをあらゆる穢れから清めたまえ。善き方よ、われらの霊を救いたまえ」。

1b「聖なる神、聖なる力、聖なる不死なる者よ、われらを憐れみたまえ。聖なる神、聖なる力、聖なる不死なる者よ、われらを憐れみたまえ。聖なる神、聖なる力、聖なる不死なる者よ、われらを憐れみたまえ。栄光は父と子と聖霊に、今もいつも世々としえに、アーメン」。

1c「聖三位一体よ、われらを憐れみたまえ。われらの主よ、われらを罪から清めたまえ。創造主よ、われらの罪を赦したまえ。聖なる者よ、われらを顧み、あなたの名によってわれらの病を癒したまえ。主よ、憐れみたまえ。主よ、憐れみ

「常なる初め」は終わる。以下「常用祈禱文」が続き、まず 2) 「『詩篇』第 50 篇」が挙がる。この番号はビザンティン典礼が拠るギリシア語訳旧約聖書の『詩篇』番号に従っているため、これは通常「『詩篇』第 51 編」として知られる、ダビデの痛悔の祈りを指す。この『詩篇』第 51 編は、ビザンティン典礼の「朝課」において、福音朗読の後、信徒たちが福音書に接吻するため進み出る際に併唱される。

私見によれば、この『詩篇』第 51 編についてはヘブライ語での読唱が勧められる。ラテン語訳をウルガータ訳から添えておく。

『詩篇』第 51 編

1) lam^enaṣēaḥ mizmôr l^edāwiḍ:

victori canticum David

2) b^eḥô' -' ēlāw nātān hannābī' ka' ašer-bā' ' el-baṭ-šāḇa' :

cum venisset ad eum Nathan propheta quando ingressus est ad Bethsabee

3) ḥ^onnēnī' 'ēlōhīm k^eḥasdekā k^erōḇ raḥ^ameykā m^eḥēh p^ešā' āy:

Miserere mei Deus secundum misericordiam tuam

iuxta multitudinem miserationum tuarum dele iniquitates meas

4) hereḇ kabb^esēnī mē' a^wōnī ūmēḥaṭṭā' ṭī ṭah^arēnī:

multum lava me ab iniquitate mea et a peccato meo munda me

5) kī-pešā' ay' aⁿī' ēdā' w^eḥaṭṭā' ṭī negdī ṭāmīd:

quoniam iniquitates meas ego novi

et peccatum meum contra me est semper

6) l^ekā l^eḥadd^ekā ḥāṭā' ṭī w^ehāra' b^e' ēneykā' āsītī:

l^ema' an ṭiṣdaq b^eḏoḇ^erekā tizkeh ḥ^eš^p ṭekā

tibi soli peccavi et malum coram te feci

ut iustificeris in sermonibus tuis et vincas cum iudicaveris

7) hēn-b^e' āwōn ḥōlāl^etī ūḇ^eḥēṭe' yeh^emaṭnī' immī:

ecce in iniquitate conceptus sum et in peccato peperit me mater mea

8) hēn-' e^meṭ ḥāp aṣṭā baṭṭuḥōṭ ūḇ^esātūm ḥokmā ṭōdī' ēnī:

ecce enim veritatem diligis absconditum et arcanum sapientiae manifestasti mihi

9) t^eḥaṭṭe' ēnī ḥ^e' ēzōḇ w^e' eṭhār t^ekabb^esēnī ūmiššeleg' albīn:

asparges me hysopo et mundabor lavabis me et super nivem dealabor

10) tašmī' ēnī šāsōn w^esīmḥā tāgēl^enā' ašāmōṭ dikkīṭā:

- auditum mihi facies gaudium et laetitiam ut exultent ossa quae confregisti
- 11) hastēr pāneykā mēḥaṭā' āy w^ekol-' ^awōnōtay m^eḥēh:
absconde faciem tuam a peccatis meis et omnes iniquitates meas dele
- 12) lēḥ ṭāhōr b^erā' -lī' ^elōhīm w^erūaḥ nākōn ḥaddēš b^eqirbī:
cor mundum crea mihi Deus et spiritum stabilem renova in visceribus meis
- 13) ' al-tašlīkēnī mill^ep āneykā w^erūaḥ qodš^ekā ' al-tiqqaḥ mimmennī:
ne proicias me a facie tua et spiritum sactum tuum ne auferas a me
- 14) hāšīḥā lī ś^esōn yiš' ekā w^erūaḥ n^edīḥā ṭism^ekēnī:
redde mihi laetitiam Iesu tui et spiritu potenti confirma me
- 15) ' ^alamm^edā p ^oš^e' īm d^erākeykā w^eḥaṭṭā' īm ' ēleykā yāšūḥū:
docebo iniquos vias tuas et peccatores ad te revertentur
- 16) ḥaššīlēnī midāmīm ' ^elōhīm ' ^elōhē t^ešū'ātī t^erannēn l^ešwōnī šidqātekā:
libera me de sanguinibus Deus Deus salutis meae
laudabit lingua mea iustitiam tuam
- 17) ' ^adōnāy ś^ep ātay ṭip tāḥ ūp ī yaggīd t^ehillātekā:
Domine labia mea aperies et os meum adnuntiabit laudem tuam
- 18) kī lō' -ṭaḥpōš zēḥaḥ w^e' etēnā ' **ō** lā lō' ṭirṣeh:
non enim vis ut victimam feriam nec holocaustum tibi placet
- 19) zīḥḥē ' ^elōhīm rūaḥ nišbārā lēḥ-nišbār w^eniḍkeh ' ^elōhīm lō' ṭīḥzeh:
sacrificium Dei spiritus contribulatus cor contritum et humiliatum
Deus non dispicies
- 20) ḥēṭīḥā ḥiršōn^ekā ' eṭ-šīyōn ṭīḥneh ḥōmōṭ y^erūšālāim:
benefac Domine in voluntate tua Sion et aedificentur muri Hierusalem
- 21) ' āz ṭaḥpōš zīḥḥē-šedeq ' **ō** lā w^ekālīl ' āz ya' ^alū ' al-mizbaḥ^akā p ārīm:
tunc suscipies sacrificium iustitiae oblationes et holocausta
tunc inponent super altare tuum vitulos

続いて「常用祈祷文」には3)「信仰宣言」が挙がり、これは381年の第1コンスタンティノポリス公会議で定式化された、ニケア・コンスタンティノポリス信条をその内容とする。これはギリシア語版とラテン語版が同時に公にされたものであるが、ラテン語版で読み上げるのが望ましいと思われる。なぜなら、この「信仰宣言」の中でラテン語版に、上述した *Filioque* の一句が現れるからである。この「信条」は、ビザンティン典礼による聖体祭義のうち「信徒祭義」の開始後ま

もなく読唱される。

ニケア・コンスタンティノポリス信条

Credo in unum Deum, Patrem omnipotentem, factorem caeli et terrae, visibilium omnium et invisibilium.

Et in unum Dominum Iesum Christum, Filium Dei unigenitum, et ex Patre natum ante omnia saecula. Deum de Deo, lumen de lumine, Deum verum de Deo vero, genitum, non factum, consubstantialem Patri: per quem omnia facta sunt. Qui propter nos homines et propter nostram salutem descendit de caelis. Et incarnatus est de Spiritu Sancto ex Maria Virgine, et homo factus est. Crucifixus etiam pro nobis sub Pontio Pilato; passus et sepultus est, et resurrexit tertia die, secundum Scripturas, et ascendit in caelum, sedet ad dexteram Patris. Et iterum venturus est cum gloria, iudicare vivos et mortuos, cuius regni non erit finis.

Et in Spiritum Sanctum, Dominum et vivificantem; qui ex Patre **Filioque** procedit. Qui cum Patre et Filio simul adoratur et conglorificatur: qui locutus est per prophetas.

Et unam, sanctam, catholicam et apostolicam Ecclesiam. Confiteor unum baptisma in remissionem peccatorum. Et exspecto resurrectionem mortuorum, et vitam venturi saeculi. Amen.

続いて4)には「聖母への祈り」が挙がるが、これは4a「ステイヒラ」(「いとも似つかわしきかな、神を産める方よ、あなたを「幸いなる方」また「けがれなき方」、そして「われらの神の母」と讃えることは、あなたはケルビムよりも浄らかにしてセラフィムよりも比べようもなく誉れある方。あなたは神を、御言葉を、痛みなく産んだ。われらは、真なる神の母よ、あなたを讃える」)、4b「トロパール」(「めでたし、神を産めるおとめマリアよ、恩寵に満ちた方、主はあなたとともにおられる。あなたは女性の中で祝福され、あなたの胎の実りも祝福される。あなたはわれらにキリスト、救い主にしてわれらの霊の解放者を産んだがゆえに。われらの女性おとめマリア、神の聖なる母、われら罪人たちのために祈り給え、いまもわれらの死の時も。アーメン」)が挙がる。言うまでもなく、4bは西方における「アヴェ・マリア」に相当する。

以上の「常用祈禱文」に収められている 1)「常なる初め」、2)『詩篇』第 51

篇」, 3) 「ニケア・コンスタンティノポリス信条」は, それぞれ①晩課, ②朝課, ③聖体祭儀において唱和される祈祷文であり, また 4a 「スティヒラ」および 4b 「トロパール」は, これら①②③において随時用いられ得るものであるから, この「常用祈祷文」は, 一日のうちの主要な祈祷へと展開する上での基点として機能する.

5. 『成就妙法蓮華經王瑜伽觀智儀軌』

では今度は, 「東方の典礼」を顧みることとし, 『觀智儀軌』の本文を参照しよう. 書き下し文は『國譯秘密儀軌』第 21 卷 (国訳秘密儀軌編纂局 1973) による.

A. 前々行

1) 「法華經」二十八品大意に関する偈頌 (四句一偈)

～大教王は『金剛頂經』であり, 成道法は『大日經』に拠るとするこの儀軌が, 金胎兩部合行の法華法であることを明らかにする部分である.

釋迦牟尼佛に歸命したてまつる. 方廣大乘典を宣説して, 諸の菩薩の為に, 甚深最勝の眞實教を開示したまへり. 我れ大教王, 遍照如來の成道法に依らん. 若し能く此の勝義に依って修すれば, 現世に無上覺を成ずることを得べし.

緣起初序品に歸命したてまつる. 光の中に能く因果の事を顯はし, 福德智慧究竟に至るの一乘實相の勝義門なり. 善巧方便品に歸命したてまつる. 甚深難測の如來智は, 言語道斷にして心境を離る. 是の故に方便して三乘を説きたまへり. 火宅譬喩品に歸命したてまつる. 舍利に先づ菩提の記を授けたまへり. 有情は三界の苦を覺らず, 佛三車を以て誘ひ出で令めたまへり. 厭悔信解品に歸命したてまつる. 自の劣なる乘に於て而も愧恥し, 深く渴仰を生じて遭遇し難しとす. 我れ等咸く無上寶を獲ん. 療疾藥草品に歸命したてまつる. 生盲の丈夫に慧眼を開かしめ, 而も智光の日輪の如くなるを獲しめ, 無上の乘に於て善巧を得せしむ. 最初の授記品に歸命したてまつる. 四大聲聞同じく記別せられ, 各の随って諸の世尊に奉事し, 當來に咸く菩提果を證すべし. 化城巧喩品に歸命したてまつる. 佛慇懃に昔の因縁を説き, 權りに止息せしめんが為に化城を示し, 大涅槃に至るを究竟と為したまへり. 五百弟子品に歸命したてまつる. 大聲聞僧に咸く決を授けたまふに, 則ち身中の如來藏を悟って, 無價の寶珠今覺知せりといふ. 授學無學品に歸命したてまつる. 佛・阿難と羅睺羅とを記して, 則ち法王の無偏黨を表はし, 漸く定性及び不定を攝したまへり. 傳經法師品に歸命したてまつる. 若し未來に諸の有情有りて, 此の法華の一句の偈を持すれば, 佛皆彼が與めに授記し

たまふといふ。多寶佛塔品に歸命したてまつる。淨土を示現して諸佛を集めたまへり。提婆達多には佛記を授け、龍女は無上覺を成ずることを得たりといふ。勸持經典品に歸命したてまつる。姨母と耶輸とは記別を蒙り、諸大菩薩と及び聲聞とは、咸く末法において此れを勸持せんことを願へり。修行安樂品に歸命したてまつる。經を説かば先ず安樂行に住し、現世には殊勝の報を獲得し、佛菩提に於て退轉せずといふ。從地涌出品に歸命したてまつる。八恒菩薩經を持せんことを願ふに、如來密意をもって許したまはず。涌出の菩薩を顯さんが為めの故に。如來壽量品に歸命したてまつる。佛已に成道したまひしより無邊劫なり。狂子を治せんが為めに涅槃を現じたまふも、常に靈山に住して不滅なり。分別功德品に歸命したてまつる。無數微塵の菩薩衆、佛の壽無量を宣説したまへるを聞き、各の地位を超へて菩提を證せり。隨喜功德品に歸命したてまつる。世出世間の福を校量するに、若し此の經の一句偈を聞かば、彼に超へて速かに無上道を證すと。法師功德品に歸命したてまつる。若し能く此の經典を受持せば、現に父母所生の身に於て、神通を獲得して六根を淨むと。不輕菩薩品に歸命したてまつる。往昔の難行苦行の業あるも、此の經を聞くことを得て壽命を増し、無量無邊の衆を度脱せりと。如來神力品に歸命したてまつる。佛廣長の舌相を現し、猶豫して不信のものをして淨信せ令め、是の瑞相を見て佛道を獲せしめたまへり。最後の囑累品に歸命したてまつる。如來諸の菩薩に付囑して、當さに未來末法の時に於て、流通し宣説して悵惜すること無かるべし。藥王本事品に歸命したてまつる。法を求めんが爲めの故に三昧をも并せ、身を焼いて淨明佛を供養し、難遇の經王に殷重を表せり。妙音菩薩品に歸命したてまつる。彼の佛刹從り此の土に來つて、妙法蓮華經を聽く、既に法を聞き已つて本國に還りぬ。觀音普門品に歸命したてまつる。是の菩薩の悲解脱を説いて、悉く皆諸の災難を除遣し、常住なる如幻定を顯現したまへり。陀羅尼妙品に歸命したてまつる。二菩薩及び二天王、並びに羅刹女眞言を説けるは、經の法師を護持せんが爲の故なりと。妙莊嚴王品に歸命したてまつる。藥王・藥上の本因縁あり、斯の二士善知識に由つて、菩提道を退失せずと。普賢勸發品に歸命したてまつる。若し此の蓮華經に於て、三七日に於て専ら持習すること有れば、普賢爲に淨法身を現じたまふと。

2) 四縁具足

～①親近真善知識（灌頂阿闍梨）②聽聞正法（妙法蓮華經王）③如理作意（瑜伽觀智）④法隨法行（止觀） の四縁を明らかにする部分である。

方廣大乘經に説くが如く、一切衆生の身中に、皆佛性有りて如來藏を具せり。一切衆生の無上菩提の法器に非ざるもの無し。若し此の如きの法を成就せんと欲

すれば、應さに須く是の如くの一縁を具す當し。一には眞善知識に親近すべし。眞善知識とは、即ち是れ灌頂の阿闍梨なり。二には正法を聽聞すべし。正法を聽聞するとは、即ち妙法蓮華經王なり。三には如理に作意すべし。如理に作意すとは、即ち爲れ瑜伽觀智なり。四には法隨法行なり。法隨法行とは、謂く、奢摩他毘鉢舍那を修すれば、則ち無上菩提を證するに堪任せり。

3) 結界および法華曼荼羅建立

～法華曼荼羅は大悲胎藏曼荼羅であるが、次の「前行」に見るように第二重院は金剛界三七尊であり、この經法が金胎合糝であることを表す。

若しは妙法蓮華經を修持すべし。若しは男、若しは女、則ち修真言行に依つて、菩薩の道を密行す須し。應さに先ず大悲胎藏大曼荼羅に入り、并に護摩道場を見るべし。身中の業障を滅除し、阿闍梨其が與めに灌頂するを得、即ち師従り念誦儀軌を受け、三昧耶し、護身し、結界し、迎請して供養し、乃至已身を觀じて普賢大菩薩の身に等同ならしむ。若し是の如くの上縁を具せざれば、有らゆる此の如くの一縁を讀誦し脩習するも、速疾に三昧を證成するに由無し。一一の印契儀軌眞言は、應さに灌頂阿闍梨の處に於て、躬ら親しく稟受す當し。若し師に従て稟受し決擇せずして專擅に作すをば、是れを則ち名づけて越三昧耶と爲し、受けるもの及び授くる者、俱に重罪を獲。

B. 前行

1) 簡擇念誦修行處所

既に具さに法を得て、即ち念誦修行の處所を簡擇すべし。或は伽藍に於き、或は山林樹下江河洲渚、或は自己の舍宅の法與相應せる福德の地において、

2) 掘深二肘

掘ること深さ二肘、廣さ四肘量、或は六肘八肘乃至十二肘量にし、其の處所に稱つて曼荼羅を作せ。其の地中を穿つて、若し瓦礫・灰骨・蟲炭及び諸の穢物有らば、即ち用ふるに堪へず。更に勝處を擇び、穿ち訖つて却つて土を填てよ。若し餘り有らば是れ吉祥の相なり。如し其の欠陥あらば、河の兩岸の土を取りて之を填てよ。若し其れ本より淨なるを最も殊勝と爲す。或は樓閣、或は盤石の上、船の上、佛殿の中に在らば、則ち簡擇す應からず。但し四肘の曼荼羅、乃至十二肘量なるを建つること前の所説の如し。若し廣さ十二肘ならば高卑十二指量可りにせよ。東北の隅に於て稍墊下せしめよ。是れ大吉祥なり。速疾に成就すべし。

3) 地天真言

壇既に成じ已らば、其の中央に於て、一小坑を穿つて。五種宝・五藥・五香・

五穀を安置せよ。是の如くの五宝香藥等、各の少し許りを取って、小瓶子を以て盛り、或は小甃合をもって之を一處に盛り、地天真言を以て加持すること一百八遍せよ。眞言に曰く、

1. 地天真言 *namaḥ samantabuddhānām pṛthivye svāhā.*

4) 如来慈護眞言

又佛慈護の眞言を以て加持すること一百八遍せよ。眞言に曰く、

2. 如来慈護眞言 *oṃ buddhamāitri-vajrarakṣa haṃ.*

5) 無能勝明王眞言

又無能勝明王の眞言を以て、加持すること一百八遍せよ。眞言に曰く、

3. 無能勝明王眞言 *namaḥ samantabuddhānām oṃ hulu hulu caṇḍālimātaṅgi svāhā.*

6) 告地天偈

既に加持し已らば、壇中の坑内に安置し、填め築いて平なら令め、隨時の香華飲食并に二の闕伽を以て、以用って供養せよ。其の修行者は面を東方に向へて長跪し、右の手を以て香藥を置く處を按じ、地天に告ぐるの偈を三遍或は七遍誦ぜえよ。偈に曰く、汝天親護者 諸佛の導師に於て 殊勝の行を修行して 地波羅蜜を浄め 魔軍の衆を 破すること 釋師子救世の如し、我れもまた魔を降伏し、我れ曼荼羅を畫くべし。

7) 塗地眞言

然して後に、浄土及び犢子の瞿摩夷の未だ地に墮ちざる者を取り、細沙與相ひ和して泥と爲し、以て其の壇に塗れ。乾き已るを待ちたる後、又瞿摩夷を取りて香水に和し、更に遍く塗拭し、即ち蓮子草を擣いて其の壇上を揩磨せよ。正しく塗拭揩磨する時は、塗地の眞言を誦ぜよ。遍數を限ること無く、塗り了らば即ち止めよ。眞言に曰く、

4. 塗地眞言 *namaḥ samantabuddhānām apratisame gaganasame santānugate prakṛtiviśuddhe dharmmadhāto viśodhane svāhā.*

○既塗壇已

既に壇に塗り已らば、彼の壇の量の如く、其の聖位を分かち、各の點じて、記を爲し、

8) 用五色線

然して後に五色線を用って縫合せて繩と爲し、磨する白壇香泥の汁の中に於て浸漬すること一宿し、然して後壇に拵せよ。

9) 其壇三重

其の壇は三重なり。當中の内院は八葉の蓮華を畫き、華胎の上に於て窅觀波塔を置け。其の塔中に於て、釋迦牟尼如來と多寶如來と同座にして坐せるを畫け。

10) 塔門西開

塔の門は西に開けたり。蓮華の八葉の上に於て、東北の隅従り首と為し、右に旋って布列して八大菩薩を安置せよ。初には彌勒菩薩、次には文殊師利菩薩、藥王菩薩、妙音菩薩、常精進菩薩、無盡意菩薩、觀世音菩薩、普賢菩薩なり。此の院の四隅の角内に於て、初めの東北の隅に摩訶迦葉を置き、次の東南には須菩提、西南には舍利弗、西北には大目犍連なり。

11) 第二重院

次に第二重の院に於て、其の東門に於て金剛鎖菩薩を置き、南門に金剛鈴菩薩を置き、塔の前の門に當って金剛鉤菩薩、北門に金剛索菩薩なり。

12) 於東門北置

東門の北に於て得大勢菩薩を置き、門の南に寶手菩薩を置け。次に南門の東に於て寶幢菩薩を置き、門の西に星宿王菩薩を置け。次に西門の南に於て寶月菩薩を置き、門の北に滿月菩薩を置け。次に北門の西に於て勇施菩薩を置き、門の東に一切義成就菩薩を置け。

～ここに「一切義成就菩薩」が登場することに注目したい。この菩薩は本書最終章において考察の対象となる。

13) 又東北隅

又東北の隅角の内に於て、供養華菩薩、東南の隅に供養燈菩薩を置き、西南の隅に供養塗香菩薩、西北の隅に供養燒香菩薩を置け。

14) 第三重院

次に第三重院の東門に於て持國天王を置き、南門に毘樓勒叉天王を置き、西門に毘樓博叉天王を置き、北門に毘沙門天王を置け。

15) 於東方門北

東方の門の北に於て、大梵天王を置き、門の南に天帝釋を置け。次に南方の門の東に於て大自在天を置き、門の西に難陀龍王を置け。次に西方の門の南に於て妙法緊那羅王を置き、門の北に樂音乾闥婆王を置け。次に北方の門の西に於て羅睺阿脩羅王を置き、門の東に如意迦樓羅王を置け。

16) 於東北方置

東北方に於て聖烏芻沙摩金剛を置き、東南方に聖軍吒利金剛を置き、西南方に聖不動尊金剛を置き、西北方に聖降三世金剛を置け。

17) 於壇四面

壇の四面に於て飲食界道を畫け．又四門を畫け．其の壇の上に於て天蓋を張り設け，四面に幡二十四口を懸けよ．又四角に於て各の幢幡を豎て，四の賢瓶の底黒からざる者を安いて香水を滿て盛り，瓶の口の内に於て種種なる時花の枝條を雜へ挿せ．壇の四門の兩邊に於て各の二の闕伽器を置き，香水を滿たし盛り，中に鬱金を著れ，諸の時華を泛べて極めて香潔なら令めよ．又四門に於て四の香鑪を置き，五味香を焼いて以用って供養せよ．又四隅に於て各の銅燈臺を置き，酥油をもって明と為せ．四角の外に於て各の佉陀羅木の楸を釘て．如し此の木無くんば，銅を鑄って楸に作して之れに代ふることもまた得．

18) 聖不動尊真言

若し修行者，六根清淨を求め，六千の功德を満足して法華三昧（※後述）を成就し，現世に初地に入り，決定して無上菩提を證せんことを求むるが為めには，一七日・三七日乃至七七日或は三箇月すべし．儀軌に依って其の力分に隨ひ，壇の四面に於て皆色香ある美味の種種なる食飲・乳粥・酪飯・甜脆の果子及び諸の漿等・塗香料香時華燒香燈燭を置くべし．所供養の物は，新淨の金銀の器・銅器及び好き瓷器にして，破れ缺漏すること無く，未だ曾て用ひざる者を以てすべし．以て食飲を盛るにも復た燒香を用って其の食器を熏ぜよ．即ち聖不動尊の眞言を用って加持三遍或は七遍せよ．眞言に曰く，

5. 聖不動尊真言 namaḥ samantavajrāṇaṃ caṇḍamahārocaṇasphoṭaya hūṃ traṭ hāṃ māṃ.

○既加持已

既に加持し已りて，然して後に供養せよ．壇の西面に於て卑脚の床子を置くべし．地を去ること半寸已來可にせよ．淨き茅薦を以て用ひて其の上に敷け．

19) 澡浴真言

是の修行者は毎日四時に澡浴し，四時に衣を換へよ．如し其れ時別に澡浴するに及ばざれば，即ち清淨の眞言を誦じて衣服を加持せよ．此れを即ち名づけて勝義の澡浴と為す．誦ずること三遍或は七遍せよ．眞言に曰く，

6. 澡浴真言 oṃ svabhāvaśuddhā sarvadharmā svabhāvaśuddhā haṃ.

C. 本行・胎藏部

20) 入道場

加持し已訖らば，即ち道場に入り，尊容を瞻仰すること眞佛に對ふが如く，虔恭し稽首し，至心に運想せよ．盡虚空遍法界一切の諸の佛及び諸の菩薩を想ひ禮したてまつると．

21) 誦普賢行願

既に禮拜し已りなば右の膝を地に著け、合掌して心に當て、目を閉じ意を専らにして普賢行願一遍を誦じ、一心をもって遍く諸佛菩薩を縁じ、心を定めて普賢行願の一一の句義を思惟し、大歡喜難遭の想を發すべし。

～この部分に「普賢行願」の語が見える。胎藏部であるが、普賢行願を唱えることは金胎合揉を表すものと思われる。この「普賢行願」の内実については、次々節で考察する。

22) 即跏趺坐

即ち跏趺坐して定印を結び、如來壽量品を誦ぜよ。或は但し品の中の妙義を思惟せよ。深く如來常住にして世に在すと信じ、無量の菩薩縁覺聲聞と與に以て眷屬と為し、靈鷲山に處して常に妙法を説きたまふと深く信じて疑はざれ。

23) 無量壽命決定如來真言

次に當さに即ち無量壽命決定如來の眞言七遍を誦じて是の念言を作すべし。願はくは一切の有情をして皆如來の無量の壽命を獲せしめんと。是の願を發し已って即ち眞言を誦ぜよ。曰く、

7. 無量壽命決定如來真言 *namo aprarimitā yujñānaviniścayarā jendrāya tathāgatāya om sarvasaṃskārapariśuddhadharmmate mahānayaparivāre svāhā.*

24) 若修行者

若し修行者毎日六時、時別に此の眞言を誦ずること七遍せば、能く壽命を延べ、能く夭壽決定の惡業を滅し、身心輕安なることを獲得し、諸の昏沈及び以て懈怠を離れ、此の妙法蓮華經を受持して速かに成就することを得。即ち塗香を用って二手乃至臂肘に遍く塗れ。

25) 一切如來三昧耶印

然して後に一切如來の三昧耶印を結ぶべし。二手合掌し、二大指並べて偃く豎てよ。即ち成ず。大指の頭を以て心の上に拄へ、勝義諦實相の觀門に入れ。謂はゆる毘盧遮那如來の心眞言種子の阿字、己身の心蓮華の中に在りと想へ。其の色潔白にして猶し珂雪の如し。瑩徹して光明あり。漸漸に引き舒べて一肘量に遍じ、即ち此の字の眞實の義門を思へ。阿字とは謂く、一切法本不生の故に、一切の佛法の自性本源なり。清淨法界より流出する所の一切の言教は、皆此の字を以て根本と為り。決定し專注して散動を離れよ。是の觀に住し已って即ち其の印を移して額に觸れ、眞言を誦ずること一遍せよ。次に右の肩左の肩心及び喉に觸れて皆一遍を誦ぜよ。手印を運動し眞言を誦ずる時、一縁に專注して前の如く觀想せよ。加持し已訖り、印を頂戴して然して後に解散せよ。眞言に曰く、

8. 一切如来三昧耶真言 *namaḥ samantabuddhānām asame trisame samaye svāhā.*

此の印を結び、及び真言を誦ずるに由って、則ち一切如来の地を見、三界道を超へて地波羅蜜を圓滿す。

○結法界生印

次に法界生の印を結ぶべし。二手各の金剛拳に作り、二頭指を舒べ、側め相ひ拄へよ。即ち成ず。印を頂に安じ、其の印の中に於て法界の種子なる覽字を想へ。其の色皓白にして遍く光明を流し、普く一切の有情界を照らして、能く一切の有情の虚妄煩惱を破す。當さに觀ずべし、自身及び諸の有情は同一法界にして無二無別なりと。是の觀を作し已って、即ち真言三遍或は七遍を誦ぜよ。真言に曰く、

9. 法界生真言 *namaḥ samantabuddhānām dharmadhātusvabhāvako 'haṃ.*

此の印を結び及び真言を誦ずるに由って、則ち無邊の清淨法界を證得す。

○金剛薩埵轉法輪印

次に金剛薩埵轉法輪の印を結べ。二手相ひ背けて右をもつて左を押し、左右の八指互相に鉤し、左のおお指を苾らして右の掌に入れ、右の大指を屈して頭を以て相ひ拄へよ。印を以て心の上に安じて又想へ、自の心月輪の中に卍字有り、白色清潔なり。即ち此の字を轉じて轉法輪大菩薩の身と為ると。觀智成し已って即ち真言を誦ぜよ。曰く、

10. 金剛薩埵轉法輪真言 *namaḥ samantavajrāṇām vajrātmako 'haṃ.*

此の印を結び、及び真言を誦ずる觀行力に由るが故に、即ち能く一切有情界に於て大法輪を轉ず。

○金剛甲冑

次に金剛甲冑の印を結べ。二手虚心合掌し、二頭指各の屈して中指の背上節に拄へ、二大指並べ立てて中指の中節の文を押し。即ち印を以て額に觸れて真言一遍を誦じ、次に右の肩左の肩、心及び喉の上、各の加持すること一遍せよ。真言に曰く、

11. 金剛甲冑真言 *namaḥ samantavajrāṇām vajrakavaca hūṃ.*

此の印を結び及び真言を誦ずるに由って、即ち是れ大誓莊嚴金剛の甲冑を披る。光明赫奕として、一切の天魔及び諸の作障者敢て凌逼すること能はず。正しく印を結ぶの時、是の思惟を作すべし。一切有情の生死の苦海に沈淪せるを。我れ皆拔濟して、一一の有情をして我れ與異なること無から令めんと。

○一切如来大慈印

次に一切如来大慈の印を結べ。二手外に相ひ叉へ、二大指二小指各の頭を以て

相ひ拵へて心の上を覆へ。印を結び成じ已って即ち一相平等法無我觀に入り，大慈心を起して遍く一切有情界を縁ぜよ。願はくは一一の有情に皆悉く慈心三昧を獲得せしめんと。是の觀を作し已って眞言を誦ぜよ。曰く，

12. 一切如来大慈真言 *namaḥ sarvatathāgatebhyo ye tiṣṭhamti daśa-diśi om maṇivajre hr̥dayavajre mālasainyavidrāpane hana hana vajragarbhe trāsaya trāsaya sarvamalabhavanāni hūṃ hūṃ satvara satvara buddhamaitri sarvatathāgatavajrakalpādhiṣṭhite svāhā.*

此の印を結び，及び眞言を誦じて無縁の慈觀に入るに由って，能く三千大千世界をして下風輪際に至るまで，猶し金剛の如くなら令め，，無量の天魔も傾動することを得ず，悉く皆退散す。其の修行者若し此の法を作せば，其の道場の地は即ち是れ金剛堅固の城にして，一切の障者も敢て觸惱せず，心に求願する所速かに圓滿することを得。

26) 方隅界印

次に方隅界の印を結べ。二手合掌し，二頭指二無名指を屈し，甲を以て相ひ背け，二大指を並べ立てて二頭指を押し，二小指を坼開け。即ち成ず。印を以て右に旋らすこと三匝せよ。即ち結界を成ず。眞言に曰く，

13. 方隅界真言 *namaḥ samantabuddhānāṃ lelupuri vikuli vikule svāhā.*

27) 聖不動尊印

次に聖不動尊の印眞言を以て一切諸の悪魔障を辟除せよ。右の手直く立てて頭指中指相ひ並べ，無名小指を屈して掌中に入れ，大指を以て無名小指の甲の上を捻せよ。左の手もまた然なり。左の手を以て心に當てて鞘と為し，右の手を劍と為して其の鞘の中に置け。然して後に劍を抽く勢の如くし，印を以て左に旋らして障難を辟除し，印を以て右に旋らし，意の遠近に随って結して其の界を為すべし。印を結ぶの時，應さに觀ずべし，自身即ち是れ此の尊なりと。左に金剛羂索を持し，右に金剛智刃を執り，威徳の光明遍く法界を照らすと。是の觀を作し已って即ち眞言を誦ぜよ。曰く，

14. 聖不動尊真言 *namaḥ samantavajrānāṃ caṇḍamahārocaṇasphoṭaya hūṃ traṭ hāṃ māṃ.*

此の印を結び，及び觀行に住して眞言を誦ずるに由るが故に，能く菩提心を護り，能く諸見を斷ず。若し修行者常に此の眞言を持すれば，乃し菩提に至るまで更に諸魔の為に便を得られず，速に正覺を成ず。

28) 宝山印

次に寶山の印を結んで寶山の眞言を誦ずべし。二手内に相ひ又へ，極めて深か

ら令め、二肘を豎てて相ひ著け、腕を開け。即ち是なり。眞言に曰く、

15. 宝山真言 om acala hūṃ.

此の印を結び、眞言を誦ずる加持力に由るが故に、即ち此の寶山、其の壇中に於て轉じて鷲峯山と成る。山峯の上に於て、即ち當さに一心專注して釋迦牟尼如來宣說妙法蓮華經を宣說したまふ處を觀想すべし。頗黎を地と為し、種種の妙華を遍く其の上に布き、寶樹行列して寶華を開敷し、諸の枝條の上に妙天衣を垂れ、微風に搖撃せられて微妙の音を出す。其の聲韻に諧って猶し天樂の如し、妙香普く三千世界に熏ずと。又中に於て多寶世尊の舍利寶塔を想へ。種種に莊嚴せり。釋迦牟尼如來及び多寶佛、其の塔の中に於て同座にして坐したまへり。無量の菩薩聲聞緣覺天龍八部聖賢衆會圍遶し、法を聽いて八方に周圍せり。釋迦牟尼如來の諸の分身佛、寶樹の下に於て各各に衆寶莊嚴の師子の座に坐したまへり。乃至無量微塵數の佛あり、多寶塔の前の賢瓶闍伽に八功德水悉く皆盈滿せり。妙寶香爐には無價の香を燒き、摩尼寶王を以て燈燭と為り。菩提の妙華普く諸佛及び諸の大衆に散ず、天の諸の美膳芬馥香潔し、塗香秣香珠鬘瓔珞の供養は雲海をなし、諸の波羅蜜供養の菩薩、如來の眞實の功德を歌讚したてまつる。自ら己身中に於て供獻すと見る。其の八方に於て、諸の分身の佛の一一の佛の前に、悉く皆是の如く奉獻し供養すと。又想へ、自身釋迦牟尼如來の前に在って、妙法蓮華大乘の勝義を宣說したまへるを聽聞すと。

29) 大虚空藏普供養偈

是の觀を作し已って即ち此の偈を誦ぜよ。曰く、

我が功德力と 如來の加持力と 及び法界力とを以て 普く供養して住す。

此の偈を三遍或は七遍誦じて、

30) 大虚空藏普供養印

即ち大虚空藏普供養眞言を誦ぜよ。曰く、

16. 大虚空藏普供養眞言 om gagano sambhavavajra hoḥ.

此の偈及び此の眞言を誦ずるに由って、一切如來並びに大會の衆に於て、皆眞實廣大に供養するを獲。

次に三重曼荼羅の衆會を觀ずべし。初めに中央佛並びに八大菩薩及び四大聲聞僧あり。第二院には諸の菩薩無量無數あり。第三院には諸天八部並びに四の大威徳菩薩ありて各々四隅に於り、並びに無量の忿怒眷屬あつて、一切の諸魔を退散し、侵擾することを得ること無から令むと。

31) 纒發意轉法輪菩薩印

然して後に、纒發意轉法輪菩薩の印を結べ。二手各々金剛拳に作し、二頭指二

小指互相互に鉤せよ。即ち成ず。印を以て壇の上を按じて眞言を誦すること五遍せよ。眞言に曰く、

17. 纒發意轉法輪菩薩眞言 om vajracakra hūṃ jaḥ hūṃ vaṃ hoḥ.

此の印を結び、眞言を誦するに由るが故に、其の壇中の諸佛菩薩及び諸の聖衆の量、虚空に同じく法界に遍周し、報土の佛刹を成ず。一切の有情、冥然として身心通同一相にして、影此の勝妙の刹の中に現ず。

32) 眞如法性道場觀行

則ち次に眞如法性道場の觀行に入って此の偈を誦じ、偈の中の眞實の勝義を思惟すべし。乃至心と眞如體性與相應するを限りと為よ。偈に曰く、

虚空を道場と為す 菩提は虚空の相なり また等覺者も無し 眞如の故に如來なり。

33) 一切如來并諸聖衆印

次に一切如來並びに諸の聖衆を奉請する印を結べ。二手内に相ひ又へ、合せて拳に為り、右手の頭指を舒べて其の上節を屈し、鉤の如くせよ。即ち成ず。眞言に曰く、

18. 一切如來并諸聖衆眞言 namaḥ samantabuddhānām aḥ sarvatrāpratihatatathāgatākuṣa bodhicarya paripūraka svāhā.

此の契を結び、及び眞言を誦するに由って、諸佛菩薩並びに其の眷屬、來集せずといふこと無し。行者了了分明に鷲峯山の頂、空中に在って住すと見よ。

34) 所願速成真言

即ち右邊の闕伽器を取って、二手に捧持し、額に當てて奉獻せよ。諸佛菩薩及び諸の聖衆の足を浴すと想へ。即ち爾の時に於て虔恭殷重に諸佛に啓告して心中の所願を求めよ。願速かに成就せん。眞言に曰く、

19. 所願速成真言 namaḥ samantabuddhānām gagana samāsama svāhā.

闕伽香水を獻じて供養するに由るが故に、修行者をして、三業清淨にして一切の煩惱罪垢を洗除せよ。

○獻花座印

次に獻華座の印を結ぶべし。二手左右の大小指各の頭相ひ拄へ、餘の六指敷らかと欲する蓮華の形の如くにせよ。即ち成ず。眞言に曰く、

20. 獻花座眞言 namaḥ samantabuddhānām āḥ.

此の印を結び、及び眞言を誦する加持力に由るが故に、即ち此の印従り無量の寶師子座並びに蓮華座・金剛座・種種諸の座を流出し、佛及び菩薩一切の聖衆、各の宜しき所に隨つて、悉く皆殊勝の座を獲得す。

～以下、『妙法蓮華經』陀羅尼品第二六中の五陀羅尼、すなわち①藥王菩薩②勇施菩薩③毘沙門天王④持国天⑤十羅刹女による呪が挙がる。

35) 藥王菩薩等諸真言

次に普通印を結べ。二手内に相ひ又へて拳に為し、諸指の節をして稍や起さ令めよ。即ち藥王菩薩等の諸の眞言を誦じて曰く、

21. 藥王菩薩諸真言 tadyathā anye manye manye mamanye cinte carite śame śamitā viśānte mukte muktatame same aviśame samasame jāṃye kṣaye akṣaye akṣīni śānte śamidhāraṇi ālokabhāse pratyavekṣaṇi hihiru abhyantaraniviṣṭe atyantapariśuddho ukkule mukkule araḍe paraḍe śukākṣī asamasame buddhavilokite dharmaparīkṣite saṃghaṇi ghoṣaṇi bhayābhayaviśodhanī maṃtre mantrā kṣayate urte rutakośalye akṣaye akṣayavanatāya valo amanyanatāya svāhā.

○勇施菩薩陀羅尼

勇施菩薩陀羅尼に曰く、

22. 勇施菩薩陀羅尼 tadyathā jvale mahājvale ukke mukke aḍe aḍāvati nṛṭye nṛṭyavartti iṭṭini viṭṭini ciṭṭini nṛiṭṭini nṛiṭṭāvati svāhā.

○毘沙門陀羅尼

毘沙門陀羅尼に曰く、

23. 毘沙門陀羅尼 tadyathā aṭye naṭye ‘nunaṭye anaḍo nāḍi kunāḍi svāhā.

○持国天王陀羅尼

持國天王陀羅尼に曰く、

24. 持国天王陀羅尼 tadyathā agaṇe gaṇe gauri gāndhāri caṇḍāli mātaṃgi pukkaṣi saṃkule vrūṣale svāhā.

○十羅刹女陀羅尼

十羅刹女陀羅尼に曰く、

25. 十羅刹女陀羅尼 tadyathā itime itime itime itime itime nime nime nime nime nime ruhe ruhe ruhe ruhe ruhe stahe stahe stahe stahe stahe svāhā.

上の如くの諸の眞言を誦ずるに由るが故に、持經者に於て大加持を作し、諸の惡鬼神悉く皆遠離して敢て附近せず。行住坐臥乃至夢中にもまた敢て觸惱せず。一切時の中に、皆安樂なることを得。應さに是の思惟を作すべし。此の妙法蓮華經王に於て、殷重の心・難遭の想を起すべし。

○復作念言。

復た念言を作せ。我れ無始生死従り六趣に輪廻すること、皆虚妄顛倒の分別に

由り、早く是の如くの教王菩薩の道法に遇ふことを得ず。今既に聞くことを得、見ることを得て受持し讀誦するは、皆是れ諸佛菩薩慈悲愍念して、我れをして此の如くの妙法經王に値遇せ令めたまふなり。是の如くの深恩將に何を以て報ぜん、設使ひ三千世界の中に滿つる勝妙一切の珍寶並びに及び飲食香華、幡蓋國城妻子の微塵數の如くなるを。乃至身命もまた是の如く悉く皆捨施して、如來及び此の妙法蓮華大乘寶法に供養し、多劫を經と雖も、また未だ一偈之恩をも報ずること能はず、深く慚愧を生ぜよ。

○復作念言。

復た念言を作すべし。我が所聞の如きは、遍照如來が諸の菩薩の爲に、眞言祕密の法の供養を宣説したまへるなり。諸の世間の諸の供養の中に於て、法を以て供養するを最と爲し勝と爲す。今我れ諸佛の深恩を報ぜんが爲に、眞言行の菩薩の方便儀軌に依って、用って普く盡虚空遍法界の一切の諸佛及び大菩薩を供養したてまつるべし。是の念を作し已って、

～以下「五供養」に移る。五供養とは、塗香、花鬘、焼香、飲食、燈明の5種を言う。

36) 塗香印

即ち塗香の印を結べ。先ず右の手を舒べ、掌を豎てて外に向へ。左の手を以て右の手の腕を握って塗香の勢に作せ。即ち成ず、眞言に曰く、

26. 塗香真言 namaḥ samantabuddhānāṃ viśuddhagandhodbhavāya svāhā.

手印を運んで眞言を誦する時に當って想へ、印及び眞言不思議加持の願力法の中従り、無量無邊の塗香雲海を流出して、諸佛菩薩一切聖衆の淨妙色身と及び其の刹土とを遍く塗りたてまつると、此の法を作すに由って、現當來世の戒・定・慧・解脱・解脱知見の五無漏蘊の法身の香を獲得す。若し或は聲聞乘の中の律儀の戒品を違犯せんに、或は菩薩道の中の清淨の律儀を違犯せんに、纔かに此の印を結んで眞言一遍を誦すれば、一切の戒品悉く皆清淨なること故(ト)の如くにして、惡趣に墮せず、疾く三昧を證す。

○花供養印

次に華供養の印を結べ。二手内に相ひ又へ、二頭指相ひ拵へて圓なら令め、二大指各の頭指の根下を捻し、餘の六指掌中に入れて華の形の如くならしめしめよ。即ち是れなり。眞言に曰く、

27. 花供養真言 namaḥ samantabuddhānāṃ mahāmaitryabhyudgate svāhā.

正しく印を結び眞言を誦する時、運想して諦かに觀ぜよ。印眞言不思議願力加

持法の中に於て、無量無邊の天の妙華雲海を流出して、一切の諸佛菩薩及び諸の聖衆に供養すと、此の印を結び及び眞言を誦ずるに由つて、能く自心の蓮華を開敷せ令め、行者をして六根清淨にして相好端嚴なるを獲得し、人に見んと樂はれ、一切の煩惱及び隨煩惱に於て染汚せ被れず、身心寂靜なり。

○焼香供養印

次に焼香供養の印を結べ。二手の中指已下の三指を堅てて相ひ背け、二頭指側め相ひ拄へ、二大指各の頭指の根下を捻せよ。即ち成ず、眞言に曰く、

28. 焼香供養眞言 namaḥ samantabuddhānām dharmadhātvanugate svāhā.

正しく此の印を結び眞言を誦ずる時、運心して觀想せよ、印眞言の不思議願力加持の法の中従り、無量無邊の焼香雲海を流出して、普く一切の佛及び菩薩并に諸の聖衆に熏じたてまつる。此の印を結び、並びに眞言を誦ずるに由つて、般若波羅蜜を獲得し、能く一切の惡見並びに諸の結使を斷じ、疾く無上正等菩提を證す。

○飲食供養印

次に飲食供養の印を結べ。二手虚心に合掌し、掌を開いて猶じ器の形の如くせよ。即ち是なり。眞言に曰く、

29. 飲食供養眞言 namaḥ samantabuddhānām arara karara baliṃ dadāmi baliṃ dade mahāmaitryabaliḥ svāhā.

正しく此の印を結んで眞言を誦ずる時、至誠に運想せよ。印眞言の不思議願力加持の法の中従り、無量無邊の天妙香潔の飲食雲海を流出し、一一の佛菩薩諸の聖衆の前に於て、七寶の器を盛って羅列し奉獻すと。此の印を結び、及び眞言を誦じて運心供養するに由つて、法喜食・禪悅食・解脫勝味食を獲得す。

○供養燈明印

次に供養燈明の印を結べ。右の手を拳に為して、中指を直ぐ堅てよ。即ち成ず。眞言に曰く、

30. 供養燈明眞言

namaḥ samantabuddhānām tathāgatārcisphuraṇāvabhāsanagaganaudārya svāhā.

正しく此の印を結び、眞言を誦ずる時、運心して諦かに想へ。諸佛菩薩、印眞言不思議願力加持の法の中従り、無量無邊の衆寶王と、及び日月の光明との如き燈燭雲海を流出して、諸佛及び諸の菩薩一切の大會を照耀す。此の印を結び、及び眞言を誦ずるに由つて、三種の意生の身を獲得して、能く無明住地の煩惱を滅す。是の修行者、是の供養を作し已れ。

D. 本行・金剛界部

37) 入実相

次に則ち實相三摩地に入りて、一切の法は如幻にして因縁和合して生ずと觀ずるが故に、一切の有情は無所得を知るを以て方便と為す。一切の法は陽焰の如しと觀じ、上は淨妙佛刹に至り、下は雜染世界に至るまで、また無所得なるを以て方便と為す。一切の法は夢の如しと觀じ、世間の受用に於ける、樂受・苦受皆無所得なりと知って以て方便と為す。一切の法は影像の如しと觀じ、自他の身業無所得なりと知って以て方便と為す。一切の法は響應の如しと觀じ、一切自他の語言、上は諸佛に至り、下は諸の有情類に至るまでの語業、無所得なりと知るを以て方便と為す。一切の法は光と影との如しと觀じ、自他の心に於て心と及び心所の法は不即不離にして、悉く無所得なりと知るを以て方便と為し、即ち眞如を證す。一切の法は水月の如しと觀じ、初地より乃至法雲地の菩薩に至るまで、心は水の如しと觀じ、清淨菩提心三摩地は月の如しと觀じ、心と月とは無二無別にして、また無所得なるを以て方便と為し、即ち眞如を證す。一切の法は佛の變化の如しと觀じ、心心所の縁慮の無所得を知るを以て方便と為し、則ち大空三摩地に入る。眞如法界は佛界有情界に遍周し、無間無斷にして言説を遠離し、及び能縁所縁を離る。若し眞證の門に約すれば、唯じ自覺聖智の境界の所得なり。

38) 三摩地印

次に即ち三摩地の印を結ぶべし。二手金剛縛にして加趺の上に仰げ。二頭指を以て中節を屈して相ひ拄へ、甲を相ひ背け、二大指の頭を以て頭指の甲の上に相ひ拄へ、臍の下に置け。目を閉じ心を澄して、通達無礙心の眞言を誦すること七遍せよ。眞言に曰く、

31. 三摩地眞言 om cintaprativedaṃ karomi.

眞言を誦し已って則ち慮を静め、專注して自心を尋求せよ。今我が此の心は青とや為ん、黄とや為ん、赤とや為ん、白とや為ん、方とや為ん、圓とや為ん、長とや為ん、短とや為ん、是れ過去とや為ん、是れ未來とや為ん、復た現在とや為ん、やや久しく推求して此の心ついに不可得なることを知るときは、則ち能く空觀に通達し、我法の二執も亦不可得なり。則ち能く人空智・法空智に悟入す、則ち此の無所得の心に於て圓明を觀ぜよ。淨にして塵翳無きこと秋の満月の如く、身に炳現して心上に仰げたり。則ち此れは是れ本源清淨大圓鏡智なり。是の觀を作し已って則ち菩提心の眞言を誦すること七遍せよ。眞言に曰く、

32. 菩提眞言 om bodhicittam utpādayāmi.

39) 五鈷金剛智杵觀

眞言を誦じ已って、當に圓明の満月の面上に於て、五鈷金剛智杵を觀ずべし。漸く引き遍く舒べて法界に普周す。淨光明を以て一切の有情界を照燭し、客塵煩惱自他清淨にして、平等平等同一體性なり。是の觀を作し已って即ち眞言を誦じて曰く、

33. 菩提眞言 *oṃ tiṣṭha vajra.*

○金剛薩埵眞言

良や久しく諦かに觀じて、復た漸く其金剛杵を收斂せよ。大きき己が身の量の如し。眞言を誦して曰く、

34. 金剛薩埵眞言 *oṃ vajrātmako 'haṃ.*

40) 金剛杵

復た觀ぜよ、此の金剛杵轉じて普賢大菩薩の身と成る、光明皎潔にして猶し月殿の如し。五佛の冠を戴き、天衣瓔珞をもって而も自ら莊嚴せり。身背に月輪あり。白蓮華王を以て其の座と為し、右の手に菩提心の五鈷金剛杵を持して、心上を按じ、左の手に般若波羅蜜の金剛鈴を戴き、用って膀を按ず。一切の相好悉く具足せしむ。是の觀を作し已って復た自ら思惟すべし。一切の有情は如來藏の性なり。普賢菩薩の身一切に遍ずるが故に、我れと普賢及び諸の有情と無二無別なり。審諦に觀じ已って眞言を誦すること七遍せよ。眞言に曰く、

35. 金剛杵眞言 *oṃ samantabhadro 'haṃ.*

41) 普賢菩薩三昧耶印

眞言を誦じ已って、則ち普賢菩薩の三昧耶の印を結べ。二手外に相ひ又へ、合して拳に為り、二中指を合せ堅てよ。即ち成ず、印を以て心を印して誦すること一遍せよ。次に額に安じ、次に喉と頂とに及ぼして各の誦すること一遍せよ。眞言に曰く

36. 普賢菩薩三昧耶眞言 *oṃ samayasatvaṃ.*

42) 五佛冠印

次に五佛冠の印を結ぶべし。二手金剛縛にし、二中指を堅てて上節を屈し、頭を以て相ひ拄へ、二頭指各の中指の上節を捻せよ。印を以て頂上に置いて眞言を誦すること一遍せよ。次に額上髮際に安じて誦すること一遍し、次に頂の右・頂の後・頂の左に移して各の誦すること一遍せよ、眞言に曰く、

37. 五佛冠眞言 *oṃ sarvatathāgataratnavireka āḥ.*

43) 宝鬢印

次に寶鬢の印を結べ。二手各の金剛拳に作して、額の上にして互相に縈ひ遶ら

し、鬘を繋る勢の如くし、即ち拳を分ちて腦の後に於てまた帶を繋るが如くせよ。其の二手各の小指従り徐徐として散し下し、拳を旋らして舞するが如くせよ。繋くるの時に當って隨つて眞言を誦ぜよ。曰く、

38. 宝鬘眞言 *oṃ vajramālābhiṣiṅcakā vaṃ*.

44) 金剛甲冑印

次に金剛甲冑の印を結べ。二手金剛拳にして正しく心に當て、各の頭指を舒べて互相に繋ひ遶らし、口に唵砧の二字の眞言を稱へよ。次に背の上に移してまた相ひ繋ひ遶らし、却つて臍に至し當て、次に右の膝・左の膝、次に臍、次に腰の後、次に心、右の肩・左の肩、喉及び項の後。皆相ひ繋ひ遶らし、次に額の上、及び以て腦の後に至して、皆鬘帶を繋ける勢の如くせよ。二手兩邊より徐徐として散じ下し、便ち拍掌すること三遍せよ。歡悦一切聖衆の印と名づく。而も眞言を誦ずること三遍せよ。眞言に曰く、

39. 歡悦一切聖衆眞言 *oṃ vajra tala tuṣya hoḥ*.

～以下『妙法蓮華經』普賢菩薩勸發品第二八に収められる普賢菩薩による呪が挙がる。

45) 普賢菩薩大印身

修行者既に普賢菩薩の大印身を成じ已つて、又普賢菩薩の三摩地の印を結び、普賢行願を修して、文殊師利菩薩の般若波羅蜜三解脱門に入るべし。謂はゆる空三摩地に入り、運心して法界に遍周し、豁然として一法の得可き有ること無し。須臾の頃に於て心を澄し、慮を靜めて此の觀門に住せよ。此の三摩地に入るに由つて一切の見を滅除す。空執を除かんが爲に、則ち無相三摩地に入る。須臾の頃に於て此の觀門に住せよ。此の三摩地に入るに由りて空相を滅す。則ち無願三摩地に入れ。眞如智に於て本願求すべきこと無し。須臾の間に此の觀に住し已つて、則ち自身の中に於て心臆の間に當つて、其の圓明を觀ぜよ。一肘量ばかりなり。猶し秋月の光明澄淨なるが如くにして、印心中に在り。則ち普賢菩薩の陀羅尼を誦せよ。眞言に曰く、

40. 普賢菩薩陀羅尼 *tadyathā adaṇḍe daṇḍa pativartte daṇḍā vartte daṇḍā varttane daṇḍa kuśale daṇḍa sudhari sudhāra patibuddha paśyane sarvadhāraṇi āvartani sarvabhāṣāvarttani su-āvarttani saṃgha parīkṣite saṃgha nirghoṣane saddharma suparīkṣite asaṃghe saṃghāpagate tri-atve saṃghatulya pramūrte sarvasaṃgha samātikratte sarvadharmma suparīkṣite sarvasatvaruta kauśalyānugate saṃgha vikrīḍite anuvartte varttini varttāli svāhā.*

46) 陀羅尼文字

即ち此の陀羅尼文字を以て右に旋らし、心月輪の面上に布列して觀ぜよ。一一の字皆金色の如し。一一の字の中より光明を流出して、遍く無量無邊の一切世界を照らす。良や久しく心を用ふるに、心散動せずんば、則ち一一の字に於て、實相の義門を思惟せよ。又一一の字の中に皆阿字義門有りて、一切の法の本不生・不滅・不有・不無・不即・不異・不増・不減・非淨・非不淨を詮す。若し能く此の實相縁生の法門を悟れば、則ち能く無量無邊三摩地と、無量無邊の般若波羅蜜とを證得す。

47) 專注觀

次に專注して觀ずべし、舌端に於て八葉の蓮華有り。華の上に佛いまして、結伽趺坐して猶し定に在すが如し。想へ、妙法蓮華經の一一の文字、佛の口従り出でて皆金色と作る。具に光明有つて遍く虚空に連なる。想へ、一一の字皆變じて佛身と爲り、虚空に遍滿して持經者を圍遶す。其の持經者其の力分に隨つて、或は一品或は全一部を誦して、緩ならず急ならざれ、是の觀を作す時、漸く身心の輕安調暢なることを覺るべし。若し能く久長にして是の觀行を作せば、則ち定中に於て、了了に一切如來が甚深の法を説きたまへるを見たてまつることを得。聞き已つて思惟すれば、

48) 法身眞如觀

則ち法身眞如觀に入りて、一縁一相平等なること猶し虚空の如し。若し能く專注して無間に修習すれば、現生に則ち初地に入り、頓に一大阿僧祇劫の福智の資糧を集む。衆多の如來に加持せらるるに由るが故に、乃し十地等覺妙覺に至つて、薩婆若智を具し、自他平等にして、一切如來の法身と共に同じく、常に無縁の大悲を以て、無邊の有情を利樂して、大佛事を作す。若し念誦觀智已れば、

49) 普賢菩薩三昧耶印

則ち普賢菩薩の三昧耶の印を結んで、眞言七遍或は三遍を誦ぜよ。

50) 五種供養印

則ち次に五種の供養の印を結び、各の眞言を誦ずること三遍して、諸佛聖衆に供養せよ。則ち左邊の闍伽を取り、額に當て奉獻し、心中所求の廣大成佛の願を祈るべし。

51) 聖不動尊印

次に聖不動尊の印を結び、左に轉じて解界し、則ち無縁の大悲に入つて自他平等なること、喩へば虚空の若し。則ち法身觀に入つて無形無色にして、名に於き義に於て戲論する所無し。

52) 三昧耶印

則ち三昧耶の印を結び、頂上に置いて眞言を誦すること一遍して、聖會を送り奉れ。

53) 奉送

眞言門の儀軌に約して送り奉ると雖も、常恒に思惟せよ。一切の聖衆は同一法界にして、來も無く、去も無く、願力成就して當に靈鷲山中に在す。則ち起ちて遍く一切の諸佛菩薩を禮し、右の膝を地に著けて普賢行願を誦すること一遍せよ。則ち起ちて窣堵波を旋遶し、或は經行し、四威儀に於て心阿字觀門に住して、勝義實相般若波羅蜜門に入り、念念に遍く一切の有情を縁ぜよ。三界六趣四生をして、願はくは妙法蓮華經王を獲得せしめ、聞思惟修習に於て速かに無上正等菩提を證せしめん。

この『觀智儀軌』にあつては、本行の前半部（C）が胎藏法に相当し、同後半部（D）が金剛界法に相当する。前半の胎藏部行法の部分が量的に上回っており、これはこの『觀智儀軌』の拠って立つ曼荼羅が胎藏部曼荼羅であることに合致する。しかし胎金兩部の合糝法であるという点は動かず、前半胎藏法に『妙法蓮華經』のうちの五陀羅尼が、そして後半金剛界法に普賢菩薩陀羅尼が配されている。

注目したいのは、21、45、53において、それぞれ「普賢行願」を誦すことが命じられている点である。45は普賢菩薩陀羅尼を誦持する箇所であるが、21は胎藏部の始め、53は金剛界部の終わりに当たる。この「普賢行願」とは、通常「五悔」として取り上げられる句よりも、むしろ『普賢行願讚』を指すとする解釈の方が有力である（秋山 2018 予定）。

6. 『普賢行願讚』

『華嚴經』、正確には『大方廣佛華嚴經』の漢訳は3種存在し、それぞれ「六十華嚴」「八十華嚴」「四十華嚴」と呼ばれるが、このうち「四十華嚴」は、「六十華嚴」「八十華嚴」の末尾に収められた大部の章「入法界品」のみに相当する。つまり「六十華嚴」と「八十華嚴」は「入法界品」で閉じられるが、「四十華嚴」はさらにこの品をめぐる62個の頌を加えており、これは仏駄跋陀羅（359-429）訳『文殊師利發願經』、あるいは不空（705-774）訳『普賢行願讚』と同一テキストの異訳文である。これにはサンスクリットの原文が伝わっており、慈雲も『普賢行願讚的示』その他の著作において、その原文校訂作業に勤しんだ。この『普賢行願讚』には、仏教諸宗派の日常勤行に広く取り入れられている「懺悔文」（我昔

所造諸悪業 皆由無始貪瞋痴 從身語意之所生 一切我今皆懺悔；第8頌，第29-32句)が含まれていることで知られる。この七字頌自体は般若三蔵訳「四十華嚴」によるものであるが、慈雲は、全62頌より成るこの『普賢行願讚』を終生重んじ、梵本研究に勤しむばかりでなく、密教儀軌の基礎としても重用していた。慈雲は不空による訳文を常用併記している。

『普賢行願讚』は、上記のように『華嚴經』系の經典である。『華嚴經』は十を基数とする特徴を持ち、慈雲が主唱した「十善戒」も、その基本的な理念は『華嚴經』にあると考えられる。こうして「普賢行」には「十義」(礼拝, 供養, 懺悔, 随喜, 請轉法輪, 請仏久住, 善根廻向, 解義, 究竟, 得益)が含まれ、この『普賢行願讚』には「十願」を読み取ることができるとされる。それは「①敬礼諸仏〔身〕 ②称讚如来〔口〕 ③広修供養〔意〕 ④懺悔業障 ⑤随喜功德 ⑥請轉法輪 ⑦請仏住世 ⑧常随仏学 ⑨恒順衆生 ⑩普皆廻向」であり、①②③は「至心帰命」、④は「至心懺悔」、⑤は「至心随喜」、⑥⑦は「至心勧請」、⑧⑨⑩は「至心廻向」を表すとされる。これは上掲の「五悔」の内容と一致している。

『普賢行願讚』の原典梵本は、泉論文(泉1929)あるいは足利論文(足利1956)で詳細に検討されているとおり、綴字上、正則サンスクリットとは言えない。デーヴィは、正則梵語に改めたデーヴァ・ナーガリー表記の梵本にチベット語訳を付し、テキストを公刊しており(Devi 1958)、サンスクリット学習・教育に大いに資する。以下、綴り字はこのデーヴィのテキストを基準としたが、分ち書きについては、連声がある場合には分ち書きせず、複合語表記(-)は足利論文を参考にした。また泉論文、足利論文はそれぞれ、テキスト校訂の論文であることから推測されるように、『普賢行願讚』本文には数種の伝承があり、相違は多岐にわたるが、以下ではそれらを勘案することをしなかった。行間には不空訳の『普賢行願讚』訳文を挿入したが、上述したように、これが意味上サンスクリット文と一致しているわけではない。また見出し語として、本学所蔵・慈雲の『普賢行願讚的示』に載る見出しを付した。私見では、この讚はサンスクリットでの誦唱が勧められる。

・ 礼敬諸佛

1) yāvantaḥ kecid daśa-diśi loke sarve-tryadhva-gatā nara-simhāḥ
tān ahaṃ vande sarvān aśeṣān kāyena vācā manasā prasannaḥ

所有十方世界中 一切三世人獅子 我今礼彼尽無余 皆以清浄身口意

2) kṣetra-rajopama-kāya-praṇāmaiḥ sarva-jinānām karomi praṇāmam

sarva-jinābhimukhena manasā bhadracaryā-praṇidhāna-balena

身如刹土微塵數 一切如來我悉禮 皆以心意對諸佛 以此普賢行願力

3) eka-rajāgre rajopama-buddhān buddha-sutānām niṣaṅṅakān madhye

evam aśeṣato dharmatā-dhātūn sarvān adhimuñcāmi pūrṇān jinaiḥ 3)

於一塵端如塵佛 諸佛佛子坐其中 如是法界盡無余 我信諸佛悉充滿
・稱讚如來

4) teṣāṃ cākṣaya-varṇa-samudrān sarva-svarāṅga-samudra-rutaiḥ

sarva-jinānām guṇān bhaṅgān tān sugatān stavomyaham sarvān

於彼無盡功德海 以諸音聲功德海 闡揚如來功德時 我常讚歎諸善逝
・廣修供養

5) puṣpa-varaiś ca mālya-varair vādyā-vilepana-chatra-varaiḥ

dīpa-varaiś ca dhūpa-varaiḥ pūjanam teṣāṃ jinānām karomi

以勝花鬘及塗香 及以伎樂勝傘蓋 一切嚴具皆殊勝 我悉供養諸如來

6) vastra-varaiś ca gandha-varaiś cūrṇa-putaiś ca meru-samaiḥ

sarva-viśiṣṭa-vyūha-varaiḥ pūjanam teṣāṃ jinānām karomi

以勝衣服及諸香 末香積聚如須彌 殊勝燈明及燒香 我悉供養諸如來

7) ratna-varaiś ca hāra-varair divya-vicitra-vitāna-varaiḥ

sarva-dhvajāgra-patākā-varaiḥ pūjanam teṣāṃ jinānām karomi

※Devi によればこの第7偈は後代の書き入れである。偈末が同じ句であるほか、前2行で不足していると思われた奉納物、たとえば宝石、首飾り、天蓋、旗、幟を補記する目的であるという。

・結上

8) yā cānuttarā-pūjodārā tām adhimuñcāmi sarva-jinānām

bhadracaryādhimukti-balena vande pūjayāmi jinān-sarvān

所有無上廣大供 我悉勝解諸如來 以普賢行勝解力 我禮供養諸如來
・懺除業障

9) yaccha kṛtam mayā pāpam bhaved rāgato dveṣato moha-vaśena

kāyena vācā manasā tathaiva tat pratideśayāmyaham sarvam

我曾所作衆罪業 皆由貪欲瞋恚癡 由身口意亦如是 我皆陳說於一切

～古來「懺悔文」として仏教諸派において広く読誦されている原典の一節である（懺悔文「我昔所造諸惡業 皆由無始貪恚癡 從身語意之所生 一切我今皆懺悔」それ自体は、般若三藏による異訳『四十華嚴』による）。

・隨喜功德

- 10) yaccha daśa-diśi puṇyaṃ jagataḥ śaikṣāśakṣa-pratyekajinānām
buddha-sutānām atha sarva-jinānām tad anumodayāmyaham sarvam
所有十方群生福 有學無學辟支佛 及諸佛子諸如來 我皆隨喜咸一切
• 請轉法輪
- 11) ye ca daśa-diśi-loka-pradīpā bodhiṃ vibudhyāsaṅgataḥ prāptāḥ
tān aham sarvān adhyeṣayāmi nāthāṃś cakram anuttaram vartanatāyai
所有十方世間燈 以證菩提得無染 我今勸請諸世尊 轉於無上妙法輪
• 請佛在世
- 12) ye 'pi ca nirvṛtiṃ darśitu-kāmās tān aham yāce prāñjalī-bhūtaḥ
kṣetra-rajopama-kalpān tiṣṭhantu sarva-jagato hitāya sukhāya
所有欲現涅槃者 我皆於彼合掌請 唯願久住刹塵劫 爲諸群生利安樂
• 普皆回向
- 13) vandana-pūjana-deśanānām modanādhyeṣaṇa-yācanānām
yaccha śubhaṃ mayā sañcitam kiñcid bodhye nāmayāmyaham sarvam
禮拜供養及陳罪 隨喜功德及勸請 我所積集諸功德 悉皆迴向於菩提
• 常隨佛學
- 14) pūjitā bhavantvatītakā-buddhā ye ca dhriyante daśa-diśi-loke
ye cānāgatās te laghu bhavantu pūrṇa-manorathā-bodhi-vibuddhāḥ
於諸如來我修學 圓滿普賢行願時 願我供養過去佛 所有現住十方世
- 15) yāvanti kānicid daśa-diśi kṣetrāṇi tāni parisuddhāni bhavantūdārāṇi
bodhi-drumendra-gatair jinair buddha-sutaiś ca bhavantu prapūrṇāni
所有未來速願成 意願圓滿證菩提 所有十方諸刹土 願皆廣大咸清淨
- 16) yāvantaḥ kecid daśa-diśi sattvās te sukhitāḥ sadā bhavantvarogāḥ
sarva-jagataś ca dhārmiko'rtho bhavatu pradakṣiṇa ṛdhyatvāśā
諸佛咸詣覺樹王 諸佛子等皆充滿 所有十方諸衆生 願皆安樂無衆患
• 恒順衆生
- 17) bodhi-caryām cāham caramāṇo bhaveyaṃ jāti-śmaraḥ sarva-gatiṣu
sarveṣu janmaśu cyutyupapattyoh pravrajito'ham nityam bhaveyaṃ
一切群生獲法利 願得隨順如意心 我當菩提修行時 於諸趣中憶宿命
- 18) sarva jinān anuśikṣamāṇo bhadracaryām paripūrayamāṇaḥ
śīla-caryām vimalām parisuddhām nityam akhaṇḍam acchidram careyam
若諸生中爲生滅 我皆常當爲出家 戒行無垢恒清淨 常行無缺無孔隙
- 19) deva-rutaiś ca nāga rutair yakṣa-kumbhāṇḍa-manuṣya-rutaiḥ

yāni ca sarva-rutāni jagatas teṣu ruteṣvahaṃ deśayeyaṃ dharmam

天語龍語夜叉語 鳩槃荼語及人語 所有一切群生語 皆以諸音而說法
· 常隨佛學

20) peśala-pāramitāsvabhiyukto bodhau cittaṃ mā jātu vimuhyet

yānyapi ca pāpakānyāvaraṇīyāni teṣāṃ parikṣayo bhavatvaśeṣam

妙波羅蜜常加行 不於菩提心生迷 所有眾罪及障礙 悉皆滅盡無有餘

21) karmataḥ kleśato māra-pathato loka-gatiṣu vimuktaś careyam

padmam yathā salilenāliptaṃ sūryaḥ-śaśī gagana ivāsaktau

於業煩惱及魔境 世間道中得解脫 猶如蓮華不著水 亦如日月不著空
· 恒順眾生

22) sarvāṇyapāya duḥkhāni praśamayan sarva jagat sukhe sthāpayamānaḥ

sarva-jagato hitāya careyaṃ yāvanyaḥ kṣetra-pathā diśāsu

諸惡趣苦願寂靜 一切群生令安樂 於諸群生行利益 乃至十方諸刹土

23) sattva-caryām anuvartamāno bodhi-caryām paripūrayamānaḥ

bhadracaryām ca prabhāvayamānaḥ sarvānanāgata-kalpān careyam

常行隨順諸眾生 菩提妙行令圓滿 普賢行願我修習 我於未來劫修行

24) yeṣāṃ ca sabhāgatā mama caryāyās taiḥ samāgamo nityaṃ bhavet

kāyena vācā cetasā vā eka-caryā-praṇidhānaṃ careyam

所有共我同行者 共彼常得咸聚會 於身口業及意業 同一行願而修習

25) yānyapi ca mitrāṇi mama hita-kāmāni bhadracaryayā nidarśayitṛṇi

taiḥ samāgamo nityaṃ bhavet tāni cāhaṃ na virāgayeyaṃ jātu

所有善友益我者 爲我示現普賢行 共彼常得而聚會 於彼皆得無厭心
· 供養

26) sammukhaṃ nityam ahaṃ jinān paśyeyaṃ buddha-sutaiḥ parivṛtān nāthān

teṣāṃ ca pūjāṃ kuryāṃ udārāṃ sarvān anāgata-kalpān akhinnāḥ

常得面見諸如來 與諸佛子共圍繞 於彼皆興廣供養 皆於未來劫無倦
· 護法隨學

27) dhārayamāno jinānāṃ saddharmaṃ bodhi-caryām paridīpayamānaḥ

bhadracaryām ca viśodhayamānaḥ sarvān anāgata-kalpān careyam

常持諸佛微妙法 皆令光顯菩提行 咸皆清淨普賢行 皆於未來劫修行

28) sarva-bhaveṣu ca saṃsaramānaḥ puṇyato jñānato'kṣayaṃ prāntaḥ

prajñopāya-samādhi-vimokṣaiḥ sarva-guṇair bhaveyam akṣaya-kośaḥ

於諸有中流轉時 福德智慧得無盡 般若方便定解脫 獲得無盡功德藏

• 見佛

29) eka-rajāgre rajopama-kṣetrāṇi tatra ca kṣetreṣvacintya-buddhān
buddha-sutānām niṣaṅṅakān madhye paśyeyam bodhi-caryām caramāṇaḥ
如一塵端如塵刹 彼中佛刹不思議 佛及佛子坐其中 常見菩提勝妙行

30) evam aśeṣataḥ sarva-diśāsu vāla-patheṣu tryadhva-pramāṇān
buddha-samudrān atha kṣetra-samudrān avatareyam cārikaḥ-kalpa-samudrān
如是無量一切方 於一毛端三世量 佛海及與刹土海 我入修行諸劫海

31) eka-svarāṅga-samudra-rutaiḥ sarva-jinānām sarvāṅga-viśuddhim
sarva-jagato yathāśaya-ghoṣām buddha-sarasvatīm avatareyam nityam
於一音聲功德海 一切如來清淨聲 一切群生意樂音 常皆得入佛辯才

32) teṣām cākṣaya-ghoṣa-ruteṣu sarva-tryadhva-gatānām jinānām
cakra-nayam parivartayamāno buddhi-balenāham praviśeyam
於彼無盡音聲中 一切三世諸如來 當轉理趣妙輪時 以我慧力普能入

33) eka-kṣaṇenānāgatān-sarvān kalpa-praveśān aham praviśeyam
ye'pi ca kalpās-tryadhva-pramāṇās tān kṣaṇa-koṭi-praviṣṭas careyam
以一刹那諸未來 我入未來一切劫 三世所有無量劫 刹那能入俱胝劫

• 常随佛学

34) ye ca tryadhva-gatā nara-simhās tān aham paśyeyam eka-kṣaṇena
teṣām ca gocaram avatareyam nityam māyā-gatena vimokṣa-balena
所有三世人師子 以一刹那我咸見 於彼境界常得入 如幻解脫行威力

• 莊嚴淨土

35) ye ca tryadhva-sukṣetra-vyūhās tān abhinirhareyam eka-rajāgre
evam aśeṣataḥ sarva-diśāsvavatareyam kṣetra-vyūhān jinānām
所有三世妙嚴刹 能現出生一塵端 如是無盡諸方所 能入諸佛嚴刹土

• 親近諸佛

36) ye cānāgatā-loka-pradīpās teṣām vibodhanam cakra-pravṛttam
nirvṛti-darśanam niṣṭhā-prasāntim tān aham sarvān upasaṁkrāmeyam nāthān
所有未來世間燈 彼皆覺悟轉法輪 示現涅槃究竟寂 我皆往詣於世尊

37) ṛddhi-balena samanta-javena yāna-balena samanta-mukhena
caryā-balena samanta-guṇena maitra-balena samanta-gatena
以神足力普迅疾 以乘威力普遍門 以行威力等功德 以慈威力普遍行

38) puṇya-balena samanta-śubhena jñāna-balenāsaṁga-gatena
prajñopāya-samādhi-balena bodhi-balam samudānayaṁamāṇaḥ

以福威力普端嚴 以智威力無著行 般若方便等持力 菩提威力皆積集
39) karma-balaṃ pariśodhayamānaḥ kleśa-balaṃ parimardayamānaḥ
māra-balam abalaṃ kurvāṇaḥ pūrayeyaṃ bhadracaryābalaṃ-sarvam

皆於業力而清淨 我今摧滅煩惱力 悉能降伏魔羅力 圓滿普賢一切力
40) kṣetra-samudraṃ viśodhayamānaḥ sattva-samudraṃ vimocayamānaḥ
dharma-samudraṃ vipaśyan jñāna-samudraṃ vigāhamānaḥ

普令清淨刹土海 普能解脫衆生海 悉能觀察諸法海 及以得源於智海
41) caryā-samudraṃ viśodhayamānaḥ praṇidhi-samudraṃ prapūrayamānaḥ
buddha-samudraṃ prapūjayamānaḥ kalpa-samudraṃ careyam akhinnaḥ

普令行海咸清淨 又令願海咸圓滿 諸佛海會咸供養 普賢行劫無疲倦
・随学

42) ye ca tryadhva-gatānām jinānām bodhi-caryā-praṇidhāna-viśeṣāḥ
tān ahaṃ pūrayeyaṃ sarvān aśeṣān bhadracaryayā viśudhyeyaṃ bodhim

所有三世諸如來 菩提行願衆差別 願我圓滿悉無餘 以普賢行悟菩提
43) jyeṣṭhako yaḥ sutāḥ sarva-jinānām yasya ca nāma samanta-bhadraḥ
tasya viduṣaḥ sabhāga-caryāyai nāmayāmi kuśalam imaṃ sarvam

諸佛如來有長子 彼名號曰普賢尊 皆以彼慧同妙行 迴向一切諸善根
・常随佛学

44) kāyasya vāco manaso viśuddhiś caryā-viśuddhir atha kṣetra-viśuddhiḥ
yādṛśaṃ nāmanaṃ bhadrā-viduṣas tādṛśaṃ bhavatu samaṃ mama tena

身口意業願清淨 諸行清淨刹土淨 如彼智慧普賢名 願我於今盡同彼
45) bhadracaryāyai samanta-śubhāyai mañjuśrī-praṇidhānaṃ careyam
sarvān anāgata-kalpānakhinnaḥ pūrayeyaṃ tāḥ kriyāḥ sarvā aśeṣāḥ

普賢行願普端嚴 我行曼殊室利行 於諸未來劫無倦 一切圓滿作無餘
46) no ca pramāṇaṃ bhavaccaryāyai no ca pramāṇaṃ bhaved guṇānām
apramāṇaṃ caryāyām sthitvā jānīyām sarvāṇi vikurvitāni teṣāṃ

所須勝行無能量 所有功德不可量 無量修行而住已 盡知一切彼神通
・通述

47) yāvati niṣṭhā nabhaso bhavet sattvānām aśeṣato niṣṭhā tathaiva
karmataḥ kleśato yāvati niṣṭhā tāvatī niṣṭhā mama praṇidhānānām

乃至虛空得究竟 衆生無餘究竟然 及業煩惱乃至盡 乃至我願亦皆盡
※これは弘法大師空海の『性靈集補闕抄卷第八 高野山万燈会の願文』の句「虚空尽き衆生尽き涅槃尽きなば、我が願いも尽きん」を想起させる頌である。空海

の場合、その出典は通常『華嚴經 十地品』の歡喜地より菩薩の誓願を引用した文章だと言われるが、同じ『華嚴經』系に属すこの「普賢行願讚」に同趣旨の句が認められるのは大変興味深い。あるいは空海の出典も、この「普賢行願讚」にあると推測して間違いではないだろう。

・大願供養

48) yāni ca daśa-diśi kṣetrāṇyanantāni ratnālaṃkṛtāni dattāni jinānām
divyāni ca mānuṣa saukhya viśiṣṭāni kṣetra-rajopama-kalpāni dadyām

若有十方無邊刹 以寶莊嚴施諸佛 天妙人民勝安樂 如刹微塵劫捨施

・福生

49) yaścemam pariṇāmana rājam śrutvā sakṛjjanayed adhimuktim
bodhi-varām anuprārthayamāno agrām viśiṣṭam bhavedasya puṇyam

若人於此勝願王 一聞能生勝解心 於勝菩提求渴仰 獲得殊勝前福聚

・破惡趣見佛

50) varjitās tena bhavantiyapāyā varjitāni tena bhavanti kumitrāṇi
kṣipram sa paśyati tam amitābham yasyedaṃ bhadracaryā-praṇidhānam

彼得遠離諸惡趣 彼皆遠離諸惡友 速疾得見無量壽 唯憶普賢勝行願

51) lābhaḥ sulabdhaḥ sujīvitaḥ teṣāṃ svāgataṃ teṣāṃ idaṃ mānuṣaṃ janma
yādṛśo hi samanta-bhadras te'pi tathā na-cireṇa bhavanti

得大利益勝壽命 善來爲此人生命 如彼普賢大菩薩 彼人不久當獲得

52) pāpakāni pañcānantarīyāṇi yenājñāna-vaśena kṛtāni
sa imāṃ bhadracaryāṃ bhaṇan kṣipram parikṣayam nayatyāśeṣam

所作罪業五無間 由無智慧而所作 彼誦普賢行願時 速疾鎖滅得無餘

53) jñānato rūpato lakṣaṇataś ca varṇato gotrato bhavatyupetaḥ
tīrthika-māra-gaṇair adhrṣyaḥ pūjito bhavati sa sarva-triloke

智慧容色及相好 族姓品類得成就 於魔外道得難摧 常於三界得供養

54) kṣipram sa gacchati bodhi-drumendraṃ gatvā niṣīdati sattva-hitāya
budhyeyam bodhim-pravartayeyam cakram dharṣeyam mārām sa-sainyakam
sarvam

速疾往詣菩提樹 到彼坐已利有情 覺悟菩提轉法輪 摧伏魔羅并營從

55) ya idaṃ bhadracaryā-praṇidhānam dhārayed vācayed deśayed vā
buddho vijānāti yo'tra vipāko bodhi-viśiṣṭe mā kāmṣām janayatha

若有持此普賢願 讀誦受持及演說 如來具知得果報 得勝菩提勿生疑

・總結回向

- 56) mañjuśrīr yathā jānāti sūrah sa ca samanta-bhadras tathaiva
teṣāṃ aham anuśikṣamāṇo nāmayāmi kuśalam idaṃ sarvaṃ
如妙吉祥勇猛智 亦如普賢如是智 我當習學於彼時 一切善根悉迴向
- 57) sarva-tryadhva-gatair jinair yā pariṇāmanā varṇitāgrā
tasyā aham kuśalam ihaṃ sarvaṃ nāmayāmi varaṃ-bhadracaryāyai
一切三世諸如來 以此迴向殊勝願 我皆一切諸善根 悉已迴向普賢行
- 58) kāla-kriyāṃ cāhaṃ kurvāṇa āvaraṇāni vinivartya sarvāṇi
sammukhaṃ paśyeyaṃ tam amitābhaṃ tacca sukhāvātī-kṣetraṃ vrajeyam
當於臨終捨壽時 一切業障皆得轉 親覩得見無量光 速往彼刹極樂界
- 59) tatra gatasyemāni praṇidhānāni āmukhe sarvāṇi bhaveyuḥ samagrāṇi
tāni cāhaṃ paripūrayeyam aśeṣāṇi sattva-hitaṃ kuryāṃ yāvanto loke
得到於彼此勝願 悉皆現前得具足 我當圓滿皆無餘 衆生利益於世間
- 60) tasmin jina-maṇḍala śobhini ramye padma-vare rucira upapannaḥ
vyākaraṇam ahaṃ tatra labheya saṃmukhato'mitābha-jinasya
於彼佛會甚端嚴 生於殊勝蓮花中 於彼獲得受記別 親對無量光如來
- 61) vyākaraṇam pratilabhya ca tasmin nirmita-koṭi-śatair anekaiḥ
sattva-hitāni bahūnyahaṃ kuryāṃ dikṣu daśasvapi buddhi-balena
於彼獲得受記已 變化俱胝無量種 廣作有情諸利樂 十方世界以慧力
- 62) bhadracaryā-praṇidhānaṃ paṭhitvā yat kuśalaṃ mayā sañcitaṃ kiñcit
eka-kṣaṇena samr̥dhyatu sarvaṃ tena jagataḥ śubhaṃ praṇidhānam
若人誦持普賢願 所有善根而積集 以一刹那得如願 以此群生獲勝願
- 63) bhadracaryāṃ pariṇāmya yad āptaṃ puṇyam anantam atīva viśiṣṭam
tena jagad vyasanaugha-nimagnaṃ yātvamitābha-purīm varāṃ eva
我獲得此普賢行 殊勝無量福德聚 所有群生溺惡習 皆往無量光佛宮

慈雲はこの「普賢行願讚」を、正法律一派の毎日の朝課において、梵本に随って日々読誦していた。本稿においても、この慈雲の精神性に倣いたい。

7. 「法華懺法」

さて、上掲した『観智儀軌』にあつては、18) に「法華三昧」の字が見えた。「法華三昧」の中核部「正修行方法」には、「法華懺法」と呼ばれる伝統的な行法が含まれると理解できる（秋山 2018 予定）。本稿ではこれまで、基幹古典語として 1) ギリシア語、2) ヘブライ語、3) ラテン語、4) サンスクリットを考えてき

たが、第5番目として5) 漢文 を挙げてみたい。以下この漢文を書き下しにせずに読むことを試みてみたい(この主張については秋山 2012a, 2012b)。その際、読みは漢音読みを表記したカタカナで示してある(延暦寺学問所 1988)。

○総礼伽陀

～伽陀とは gāthā の音写語であり、四言・五言等に句を結び四句を一頌とする韻文を意味する。

我此道場如帝珠 (ガシトウジョウニョタイシュ) 十方三寶影現中 (シッポウサンポウヨウゲンチュウ)

我身影現三寶前 (ガシヨウゲンサンポウゼン) 頭面攝足歸命禮 (ズメンセツクキミョウライ)

○総礼三宝

一心敬禮十方一切常住佛 (イツシンケイレイ ショウイツセイショウチウフ) 一心敬禮十方一切常住法 (イツシンケイレイショウイツセイショウチウホフ)

一心敬禮十方一切常住僧 (イツシンケイレイショウイツセイショウチウソウ)

○供養文

是諸衆等 (シヨシウトウ) 人各跨跪 (ジンカクキ) 嚴持香華 (ケンチキョウカ)

如法供養 (ジョウホクヨウ) 願此香華雲 (ケンシキョウカイン) 遍滿十方界 (ヘンマンシホウカイ)

供養一切佛 (クヨウイツセイフ) 經法並菩薩 (ケイハツペイボサ) 聲聞緣覺衆 (セイブンエンカクシウ)

及一切天仙 (キウイツセイトンセン) 受此香華雲 (シウシキョウカイン) 以爲光明臺 (イコウヘイタイ)

廣於無邊界 (コウヨフヘンカイ) 受用作佛事 (シウヨウサフシ) 供養已禮三寶 (クヨウ レイサンポウ)

○法則

○歎仏咒願

○敬礼段

一心敬禮本師釋迦牟尼佛 (イツシンケイレイ ホンシセキヤホジフ) 一心敬禮過去多寶佛 (イツシンケイレイ カキョウタホフ)

一心敬禮十方分身釋迦牟尼佛 (イツシンケイレイ シホウフンジンセキヤホジフ)

一心敬禮東方善徳佛盡東方法界一切諸佛 (イツシンケイレイ トウホウセントクフ シントウホウハカイイツセイショフ)

一心敬禮東南方無憂徳佛盡東南方法界一切諸佛 (イツシンケイレイ トウナンポウウフユウトクフ シントウナンポウハカイイツセイショフ)

一心敬禮南方栴檀徳佛盡南方法界一切諸佛 (イツシンケイレイ ナンポウウセントクフ シナンポウハカイイツセイショフ)

一心敬禮西南方寶施佛盡西南方法界一切諸佛 (イツシンケイレイ セイナンポウウホウシフ シンセイナンポウハカイイツセイショフ)

一心敬禮西方無量明佛盡西方法界一切諸佛 (イツシンケイレイ セイホウブリョウヘイフ シンセイホウハカイイツセイショフ)

一心敬禮西北方華徳佛盡西北方法界一切諸佛 (イツシンケイレイ セイホッポウウタクフ シンセイホッポウハカイイツセイショフ)

一心敬禮北方相徳佛盡北方法界一切諸佛 (イツシンケイレイ ホッポウウショウトクフ シンホッポウハカイイツセイショフ)

一心敬禮東北方三乗行佛盡東北方方法界一切諸佛 (イツシンケイレイ トウホッポウウサンシキフ シントウホッポウハカイイツセイショフ)

一心敬禮上方廣衆徳佛盡上方法界一切諸佛 (イツシンケイレイ

イ ショウホウコウシュウトクフ シンショウホウハカイッセイショフ) 一心敬禮下方明德佛盡下方法界一切諸佛 (イッシンケイレイ カホウヘ イトクフ シンカホウハカイッセイショフ) 一心敬禮往古來今三世諸佛七佛世尊賢劫千佛 (イッシンケイレイ オウコライケンサンセイショフ シチフセイツンケンキョウセツフ) 一心敬禮法華經中過去二萬億日月燈明佛 (イッシンケイレイ ハカケイチュウ カキョジバンニク ジチゲツトウヘ イフチトウチシフシュウリクオウシフツ トウッセイカキョショフ) 大通智勝佛十六王子佛等一切過去諸佛 (タイトウチンフ シュウリクオウシフツトウ イッセイカキョショフ) 一心敬禮過去二萬億威音王佛二千億雲自在燈王佛 (イッシンケイレイ カキョジバンニク インノウフ ジセンニクインシサイトウオウフ) 一心敬禮過去日月淨明德佛雲雷音宿王華智佛等一切諸佛 (イッシンケイレイ カキョジチゲツセイヘ イトクフ インライインシュウオウカチフツトウイッセイショフ) 一心敬禮法華經中現在淨華宿王智佛寶威上王佛等一切現在諸佛 (イッシンケイレイ ハカケイチュウ ケンサヒヤクシウオウチフ ホウイトクシヨウオウフツトウ イッセイケンサイショフ) 一心敬禮法華經中未來華光佛具足千萬光相莊嚴佛等一切未來諸佛 (イッシンケイレイ ハカケイチュウ ヒラカコウフ クリケンバンコウシヨウソウケンフツトウ イッセイヒライショフ) 一心敬禮十方世界舍利尊像支提妙塔多寶如來全身寶塔 (イッシンケイレイ シホウセカイシヤリソンシヨウシテイヒョウトウ タホウジヨライセンシンホウトウ) 一心敬禮大乘妙法蓮華經十方一切尊經十二部經眞淨法寶 (イッシンケイレイ タイシヘウホウレンガケイ シホウイッセイツンケイシュウジホケイ シンセイハツポウ) 一心敬禮文殊師利菩薩彌勒菩薩摩訶薩 (イッシンケイレイ ブンジユシリホサ ヒロクホサンハカサ) 一心敬禮藥王菩薩藥上菩薩摩訶薩 (イッシンケイレイ ヤクオウホサ ヤクシヨウホサンハカサ) 一心敬禮觀世音菩薩無盡意菩薩摩訶薩 (イッシンケイレイ カンセイインホサ ブシンニホサンハカサ) 一心敬禮妙音菩薩華德菩薩摩訶薩 (イッシンケイレイ ヒョウインホサ カトクホサンハカサ) 一心敬禮常精進菩薩得大勢菩薩摩訶薩 (イッシンケイレイ ショウセイシンホサ トクタイイホサンハカサ) 一心敬禮大樂說菩薩智積菩薩摩訶薩 (イッシンケイレイ タイコウセツホサ チセキホサンハカサ) 一心敬禮宿王華菩薩持地菩薩勇施菩薩摩訶薩 (イッシンケイレイ シュウオウカホサ チチホサ ヨウシホサンハカサ) 一心敬禮法華經中下方上行等無量無邊阿僧祇菩薩摩訶薩 (イッシンケイレイ ハカケイチュウ カホウシヨウケイトウ フリョウブヘンソウキホサンハカサ) 一心敬禮法華經中舍利弗等一切諸大聲聞衆 (イッシンケイレイ ハカケイチュウ シヤリフツトウ イッセイシヨタイイブンシユウ) 一心敬禮十方一切諸尊大權菩薩聲聞緣覺得道賢聖僧 (イッシンケイレイ シホウイッセイシヨツンタイケン ホサセブンエンカトクウケンセイソウ) 一心敬禮法華經中一切聖凡衆 (イッシンケイレイ ハカケイチュウ イッセイイハンシウ) 一心敬禮普賢菩薩摩訶薩 (イッシンケイレイ ホケンホサンハカサ) 爲法界衆生斷除三障歸命禮懺悔 (イハカイシウセイトンチヨサンシヨウ キヘイレイサンカイ)

○次六根段

1) 至心懺悔 (シンサンカイ). 弟子某甲与一切法界衆生 (テイシ ヨイッセイハカイ シウセイ). 從無量世來 (シヨウブリョウセライ). 眼根因縁 (ガンゴンインネン). 貪著諸色 (タンチャクシヨセキ). 以著色故貪愛諸塵 (イチヤクセキコ タナシヨチン). 以愛塵故 (イイチンコ). 受女人身 (シュウジヨジンシン). 世世生處 (セセイセイヨ). 惑著諸色 (ケチヤクシヨセキ). 色壞我眼 (セツカカガン). 為恩愛奴

(イナンイト). 故色使 (コセキシ). 使我經歷三界 (シカケレキサンカイ). 為此幣使 (イシヘイシ). 盲無所見 (ホウブツケン). 眼根不善 (ガンゴンフセン). 傷害我多 (ショウカガタ). 十方諸仏 (シホウショフ). 常住不滅 (ショウチュウフンヘツ). 我濁惡眼 (ガタクアガン). 障故不見 (ショウコフケン). 今誦大乘 (キンショウタイシ). 方等經典 (ホトウケイテン). 歸向普賢菩薩 (キキョウホケンボサ). 一切世尊 (イツセイヤソン). 燒香散華 (ショウキョウサンカ). 說眼過罪 (セツガンカサイ). 發露懺悔 (ハッロサンカイ). 不敢覆藏 (ファンフクウ). 諸仏菩薩 (ショフボサ). 惠明法水 (ケイメイハツスイ). 願以洗除 (ケンニセンジヨ). 以是因緣 (イインネン). 令我与法界衆生 (レイカヨハカシユセイ). 眼根一切重罪 (ガンゴンイツセイヤウサイ). 畢竟清淨 (ヒツケイセイ). 懺悔已禮三宝 (サンカイレイサンボウ). 第二第三亦如是 (テイジテイサンエキシヨシ).

2) 至心懺悔 (ジシンサンカイ). 弟子某甲与一切法界衆生 (テイシヨイツセイハカシユセイ). 從多劫來 (ショウタケイライ). 耳根因緣 (ジゴンインネン). 隨逐外聲 (スイツクガイセイ). 聞妙音時 (ブンビョウインシ). 心生惑著 (シンセウケキヤク). 聞惡聲時 (ブンナケイシ). 起百八種 (キハクハツショウ). 煩惱賊害 (ハントウツクカイ). 如此惡耳 (ジヨシアクジ). 報得惡事 (ホトクアクシ). 恒聞惡聲 (コウブンナケイ). 生諸攀緣 (セイショハンネン). 顛倒聽故 (テントウテイコ). 當墮惡道 (トウタアクトウ). 邊地邪見 (ヘンチシャケン). 不聞正法 (フブンテイホウ). 處處惑著 (ショショウケキヤク). 無暫停時 (フサンテイシ). 坐此竅聲 (サキキョウセイ). 勞我神識 (ロウカシンシキ). 墜墮三途 (ツイタサント). 十方諸佛 (シホウショフ). 常在說法 (ショウサセツボウ). 我濁惡耳 (ガタクアクジ). 障故不聞 (ショウコフブン). 今始覺悟 (キンシカクゴ). 誦持大乘 (ショウチタイシ). 功德藏海 (コトクツウカイ). 歸向普賢菩薩 (キキョウホケンボサ). 一切世尊 (イツセイヤソン). 燒香散華 (ショウキョウサンカ). 說耳過罪 (セツジカサイ). 發露懺悔 (ハッロサンカイ). 不敢覆藏 (ファンフクウ). 以是因緣 (イインネン). 令我與法界衆生 (レイカヨハカシユセイ). 耳根所起一切重罪 (ジゴンソクイツセイヤウサイ). 畢竟清淨 (ヒツケイセイ). 懺悔已禮三寶 (サンカイレイサンボウ). 第二第三亦如是 (テイジテイサンエキシヨシ).

3) 至心懺悔 (ジシンサンカイ). 弟子某甲与一切法界衆生 (テイシヨイツセイハカシユセイ). 從無量劫來 (ショウブリョウケウライ). 坐此鼻根 (サシビゴン). 聞諸香氣 (ブンシヨキョウキ). 若男若女身香 (ジヤクタンジヤクシヨシキョウ). 餽饌之香 (コウセンシキョウ). 及種種香 (キッショウジヨウキョウ). 迷惑不了 (ヘイケフリョウ). 動諸結使 (トウシヨクヅシ). 諸煩惱賊 (ショハントウツク). 臥者皆起 (ガシヤカキ). 無量罪業 (フリョウサイゲョウ). 因此增長 (インソウチョウ). 以貪香故 (イタンキョウコ). 分別諸識 (フンベツシヨシキ). 處處染著 (ショショセンチャク). 墮落生死 (タラクセイシ). 受衆惡報 (シユウシユアクホウ). 十方諸佛 (シホウショフ). 功德妙香 (コトクビョウキョウ). 充滿法界 (シユウバンカイ). 我濁惡鼻 (ガタクアキ). 障故不聞 (ショウコフブン). 今誦大乘 (キンショウタイシ). 清淨妙典 (セイセイビョウテン). 歸向普賢菩薩 (キキョウホケンボサ). 一切世尊 (イツセイヤソン). 燒香散華 (ショウキョウサンカ). 說鼻過罪 (セツビカサイ). 不敢覆藏 (ファンフクウ). 以是因緣 (イ

ンネ). 令我與法界衆生 (レイカ`ヨハカイシュセイ). 鼻根重罪 (ヒ`コンチヨウサイ). 畢竟清淨 (ヒツケイセイ). 懺悔已禮三寶 (サンカイイレイサンポ`ウ). 第二第三亦如是 (テイジ`テイサン エキシ`ヨシ).

4) 至心懺悔 (ジンサンカイ). 弟子某甲与一切法界衆生 (テイシ ヨイツセイハカイ シュセイ). 從無量劫來 (ショウブ`リョウケウライ). 舌根所作 (セツコンソク). 不善惡業 (フセンナクギ`ヨウ). 貪諸美味 (タンショヒ`ビ). 損害衆生 (ソウカイシュセイ). 破諸禁戒 (ハシヨキンカイ). 開放逸門 (カイホウイツボン). 無量罪業 (フ`リョウサ`イギ`ヨウ). 從舌根生 (ショウセツコンセイ). 又以舌根 (ユウセツコン). 起口罪過 (キコウサイカ). 妄言綺語 (ホ`ウケンキギ`ヨ). 惡口兩舌 (アッコウリョウセツ). 誹謗三寶 (ヒホウサンポ`ウ). 讚嘆邪見 (サンタンシャケン). 說無益語 (セツブ`エキギ`ヨ). 鬪構壞亂 (トウコウカイレン). 法說非法 (ハツセツヒホウ). 諸惡業刺 (ショアクギ`ヨウシ). 從舌根出 (ショウセツコンシツ). 斷正法輪 (タツセイホウリン). 從舌根起 (ショウセツコンキ). 如是惡舌 (ジ`ヨシアケツ). 斷功德種 (タンコウトクシヨウ). 於非義中 (ヨヒキ`チュウ). 多端強說 (タンケンキョウセツ). 讚歎邪見 (サンタンシャケン). 如火益薪 (ジ`ヨカエキン). 舌根罪過 (セツコンサイカ). 無量無邊 (フ`リョウブ`ヘン). 以是因緣 (イシンネ). 當墮惡道 (トウタアクトウ). 百劫千劫 (ハキキョウセンキョウ). 永無出期 (エイブ`シキ). 諸佛法味 (ショフホウビ). 彌滿法界 (ヒ`バンハカイ). 舌根罪故 (セツコンサイコ). 不能了別 (フ`ウリョウヘツ). 今誦大乘 (キンショウタイシ). 諸佛祕藏 (ショフヒソウ). 歸向普賢菩薩 (キキョウホケンボサ). 一切世尊 (イツセイテイソン). 燒香散華 (ショウキョウサンカ). 說舌過罪 (セツセツカサイ). 不敢覆藏 (フ`カンフクソウ). 以是因緣 (イシンネ). 令我與法界衆生 (レイカ`ヨハカイシュセイ). 舌根重罪 (セツコンチヨウサイ). 畢竟清淨 (ヒツケイセイ). 懺悔已禮三寶 (サンカイイレイサンポ`ウ). 第二第三亦如是 (テイジ`テイサン エキシ`ヨシ).

5) 至心懺悔 (ジンサンカイ). 弟子某甲与一切法界衆生 (テイシ ヨイツセイハカイ シュセイ). 從多劫來 (ショウタケウライ). 身根不善 (シンコンフセン). 貪著諸觸 (タンチャクショツク). 所謂男女身分 (ソウ`イダ`ンシ`ヨシンバン). 柔軟細滑 (ジ`ユウセンセイカツ). 如是等種種諸觸 (ジ`ヨシトウ ショウショウショツク). 顛倒不了 (テントウリョウ). 煩惱熾然 (ハント`ウシエン). 造作身業 (ソウサクシンギ`ヨウ). 起三不善 (キサンブ`セン). 謂殺盜姪 (イットウイン). 與諸衆生 (ヨシヨシュセイ). 作大怨結 (サタイエンケツ). 造逆毀禁 (ソウゲ`キキケン). 乃至焚燒塔寺 (タ`イハンショウトウシ). 用三寶物 (ヨウサンポ`ウブツ). 無有羞恥 (フ`ユウシウチ). 如是等罪 (ジ`ヨシトウサイ). 無量無邊 (フ`リョウブ`ヘン). 從身業生 (ショウシンギ`ヨウセイ). 說不可盡 (セツブ`カシン). 罪垢因緣 (サイウインネ). 未來世中 (ヒ`ライセイツウ). 當墮地獄 (トウタチキ`ヨク). 猛火炎熾 (ハ`イカエンシ). 焚燒我身 (ハンショウカ`シン). 無量億劫 (フ`リョウイッキョウ). 受大苦惱 (シュウタイコト`ウ). 十方諸佛 (シホウショフ). 常放淨光 (ショウホウセイコウ). 照觸一切 (ショウソクイツセイ). 我身罪重 (カ`シンサイチヨウ). 障故不覺 (ショウコフカク). 但知貪著 (タンチタンチャク). 僣弊惡觸 (ソハアクツク). 現受衆苦 (ケンシュウシュウコ). 後受地獄 (コウシュウチキ`ヨク). 餓鬼畜生等苦 (カ`キチケイトウコ). 如是等種種衆苦 (ジ`ヨシトウショウショウシュウコ). 沒在其中 (ホ`ツサイチチュウ). 不覺不知 (フ`カクフチ). 今日慚愧 (キンジツサンキ). 誦持大乘 (ショ

ウチタイシ). 眞實法藏 (シンジハツウ). 歸向普賢菩薩 (キキョウホケンサ). 一切世尊 (イツセイヤイソ). 燒香散華 (シヨウキョウサンカ). 說身過罪 (セツシカサイ). 不敢覆藏 (ファンフクウ). 以是因緣 (イインネン). 令我與法界衆生 (レイガヨハカイシュウセイ). 身根重罪 (シンコンチョウサイ). 畢竟清淨 (ヒツケイヤイ). 懺悔已禮三寶 (サンカイレイサンボウ). 第二第三亦如是 (テイジテイサン エキシヨシ).

6) 至心懺悔 (シンサンカイ). 弟子某甲与一切法界衆生 (テイシ ヨイツセイヤイ シウセイ). 從無始已來 (シヨウブシライ). 意根不善 (イコンフセン). 貪著諸法 (タンチャクシヨホウ). 狂愚不了 (キョウゲフリョウ). 隨所緣境 (スイソエンケイ). 起貪瞋癡 (キタンシンチ). 如是邪念 (ジヨシヤテン). 能生一切惡業 (ノウセイヤクキョウ). 所謂十惡五逆 (ソウシユウアクゴゲキ). 猶如猿猴 (ユウシヨエンコウ). 亦如鷓膠 (エキシヨチコウ). 處處貪著 (シヨシヨタンチャク). 遍至一切 (ヘンシイツセイ). 六情根中 (リクケイコンチュウ). 此六根業 (シリッコンキョウ). 枝條華葉 (ジヨウカヨウ). 悉滿三界 (シツパンサンカイ). 二十五有 (ジシユウゴユウ). 一切生處 (イツセイヤイショ). 亦能增長 (エキノウソウチョウ). 無明生死 (フベイヤイシ). 十二苦事 (ジュウジコシ). 八邪八難 (ハツシャハツタン). 無不經中 (フブケイチュウ). 無量無邊 (フルイヨウブヘン). 惡不善報 (アクフセンボウ). 從意根生 (シヨウイコンセイ). 如是意根 (ジヨシイコン). 即是一切 (セキシイツセイ). 生死根本 (セイコンボン). 衆苦之源 (シュウコシケン). 如經中說 (ジヨケイチュウセツ). 釋迦牟尼 (セキヤボジ). 名毘盧遮那 (ヘイヤルサダ). 遍一切處 (ヘンイツセイヤイショ). 當知一切諸法 (トウチイツセイヤイシヨホウ). 悉是佛法 (シツシフホウ). 妄想分別 (ホウシヨウフンベツ). 受諸熱惱 (シュウショテントウ). 是則於菩提中 (シツクヨホテイチュウ). 見不清淨 (ケンブセイヤイ). 於解脫中 (ヨウタイツチュウ). 而起纏縛 (ジキテンバク). 今始覺悟 (キンシカク). 生重慚愧 (セイチョウサンキ). 生重怖畏 (セイチョウホウ). 誦持大乘 (シヨウチタイシ). 如說修行 (ジヨセツシュウケイ). 歸向普賢菩薩 (キキョウホケンサ). 一切世尊 (イツセイヤイソ). 燒香散華 (シヨウキョウサンカ). 說意過罪 (セツカサイ). 發露懺悔 (ハッロサンカイ). 不敢覆藏 (ファンフクウ). 以是因緣令我與法界衆生 (レイガヨハカイシュウセイ). 意根一切重罪 (イコンイツセイヤイサイ). 乃至六根所起 (タインリッコンソキ). 一切惡業 (イツセイヤクキョウ). 已起今起 (イキキ). 未來應起 (ヒライキ). 畢竟清淨懺悔已禮三寶 (ヒツケイヤイサンカイレイサンボウ). 第二第三亦如是 (テイジテイサン エキシヨシ).

○次四悔

勸請 我弟子某至心勸請 (ガテイシ シメケンセイ). 十方応化法界無量仏 (シホウイハカイフリョウ).

唯願久住轉法輪 (イケンキョウチュウテンボウリン). 含靈抱識還本淨 (カンレイホウシキカンボンセイ).

然後如來歸常住 (セニコウジヨライキシヨウチュウ). 勸請已禮三寶 (ケンセイレイサンボウ).

隨喜 我弟子某至心隨喜 (ガテイシ シモスキ). 諸仏菩薩諸功德 (シヨフホサンヨコトク).

凡夫靜乱有相善 (ハンブセيرانコウシヨウセン). 漏与無漏一切善 (ロウヨフロウイツセイヤイ).

弟子至心皆隨喜 (テイシシモカイスイキ). 隨喜已禮三宝 (スイキ レイサンホウ).
廻向 我弟子某至心廻向 (ガテイシ シモカイヤウ). 三業所修一切善 (サンギョウソウシユウイツセイヤン).
供養十方恒沙仏 (キョウヨウシホウコウサフ). 虛空法界 (キョウコウハカイ). 盡未來 (シンビライ).
願廻此福求仏道 (ケンカイツフッキョウフツドウ). 廻向已禮三宝 (カイヤウ レイサンホウ).
發願 我弟子某至心發願 (ガテイシ シモハツケン). 願臨命終神不亂 (ケンリンヘイシユウシツラン).
正念往生安樂國 (セイトンオウセイヤンラクケキ). 面奉弥陀 (メンホウウヒタ). 值衆聖 (チシュウセイ).
修行十地證常樂 (シュウケイシユウチシヨウラク). 發願已禮三宝 (ハツケン レイサンホウ).

○次十方念仏

南無十方佛 (ナモシホウフ) 南無十方法 (ナモシホウホウ) 南無十方僧 (ナモシホウソウ)
南無釋迦牟尼佛 (ナモセキヤボジフ) 南無多寶佛 (ナモタホウフ) 南無十方分身 (ナモシホウフンジン)
釋迦牟尼佛 (セキヤボジフ) 南無妙法蓮華經 (ナモヘウホウレンガケイ)
南無文殊師利菩薩 (ナモフンジュシリホサ) 南無普賢菩薩 (ナモホケンホサ)

○次經段 【『妙法蓮華經』安樂行品】

～もとより、この『觀智儀軌』自体が『妙法蓮華經』全体を集約した儀軌であるはずなので、「安樂行品」の提示は省略する。

○次十方念仏

南無十方佛 (ナモシホウフ) 南無十方法 (ナモシホウホウ) 南無十方僧 (ナモシホウソウ)
南無釋迦牟尼佛 (ナモセキヤボジフ) 南無多寶佛 (ナモタホウフ) 南無十方分身 (ナモシホウフンジン)
釋迦牟尼佛 (セキヤボジフ) 南無妙法蓮華經 (ナモヘウホウレンガケイ)
南無文殊師利菩薩 (ナモフンジュシリホサ) 南無普賢菩薩 (ナモホケンホサ)

○次後唄

処世界如虛空 (ジョセカイジョキョウコウ) 如蓮華不著水 (ジョレンガフチャクスイ)
心清淨超於彼 (シンセイテイウヰ) 稽首禮無上尊 (ケイシュレイブシヨウツン)

○次三禮

一切恭敬 (イツセイヤクケイ) 自歸依佛 (ジキイフ) 當願衆生 (トウケンシユウセイ)
體解大道 (テイカタイウ) 發無上意 (ハツブシヨウイ) 自歸依法 (ジキイハ)
當願衆生 (トウケンシユウセイ) 深入經藏 (シンジツクケイウ) 智慧如海 (チケイヤシヨカイ)
自歸依僧 (ジキイツウ) 當願衆生 (トウケンシユウセイ) 統理大衆 (トウリタイシュウ) 一切無碍 (イツセイヤブカイ)

○次七佛通戒偈

願諸衆生 (ケンシヨウシユウセイ) 諸惡莫作 (シヨアクハクサク) 諸善奉行 (シヨセンホウケイ)
自淨其意 (ジセイイ) 是諸佛教 (シヨフツコウ) 和南聖衆 (ナモセイツウ)

8. 結論.

以上本稿では、『法華経陀羅尼』および『普賢行願讃』、それに「法華懺法」を骨格とする儀軌として『成就妙法蓮華経王瑜伽観智儀軌』を取り上げ、「東方の典礼様式」として立ててみた。サンスクリット文法を、欧米に先駆けて本邦で展開した先達として、慈雲はまた傑出した古典古代学の祖とも捉えられる。『観智儀軌』に、「西方の儀軌」としてビザンティン典礼の「常なる初め」を併置し双修するならば、主要古典5語をも内的に習慣(ハビトゥス)化しうるのではないだろうか。

私見によれば、本稿のように「両部」の意味を考える場合、その「両」とは原初と終末の二極を指す。終末を統べるのが復活のイエスであるならば、原初を画すのは大日如来である。この典礼様式を、新たな「両部」—すなわち原初と終末—を併せ修すための儀軌として立てるなら、その有効性はいかに実証されるか、それを追求することが今後の課題である。

【参考文献】

- 秋山 学 2018 (予定)『律から密へ —晩年の慈雲尊者—』春風社。
- 秋山 学 2012b「呉音から西洋古典語へ—第2部 梵語語基表と呉音読み漢字索引—」『文藝言語研究 文藝篇』61, 67-120。
- 秋山 学 2012a「呉音から西洋古典語へ—第1部 印欧語文献としての弘法大師請来密教経典—」『文藝言語研究 言語篇』61, 1-81。
- 秋山 学 2010b『ハンガリーのギリシア・カトリック教会』創文社。
- 秋山 学 2010a『慈雲尊者と悉曇学—自筆本『法華陀羅尼略解』と「梵学津梁」の世界』1-36, 筑波大学 (2010.10.04~29 於: 筑波大学附属図書館貴重書展示室)。
- 足利惇氏 1956「普賢菩薩行願讃の梵本」京都大學文學部研究紀要4, 1-16。
- 泉芳環 1929「梵文普賢行願讃」大谷学報 10/2, 152-208。
- 延暦寺学問所 1988 (編)『台宗課誦』芝金声堂。
- 小野玄妙 (編纂) 1964『佛書解説大辞典』(改訂) 大東出版社。
- 鎌田茂雄・河村孝照 (ほか 編) 1998『大蔵経全解説大事典』雄山閣。
- 国訳秘密儀軌編纂局 (編) 1973 (復刻版)『國譯秘密儀軌』第21巻。
- 中村元ほか (編) 2002『岩波佛教辞典 (第2版)』岩波書店。
- 松長有慶 1989『密教』中公文庫。
- 三崎良周 1988『台密の研究』創文社。
- 密教学会 (編) 1970 (増訂)『密教大辞典』法蔵館。
- Sushama Devi (ed.), *Samantabhadracaryā-praṇidhānarāja*, New Delhi 1958.